女鑑

明　　月五日發行

第六十六號

女鑑第六十六號目次

阿立阿際



女鑑　第六十六號

女鑑

是非正邪の識別

凡、宇宙の間、物に、事に、正邪、是非の別あるは、固より、自然の理にして、千萬世、少しも、變ぜざるものなり。故に、人生の事、必、此の二者のあらざることなし。是を以て、人は、能く此の區別を判斷し得るの見識を具へざるときは、此の世に立ち難きは、男女に論なく、皆然りとす。

此の見識を具へ得るに至らんには、必、其の本を養はざるべからず。其の本とは、何ぞ。即、道義の心を養ふて、其の精神を純正ならしむること是なり。此の精神をして、常に、其の接する所の事物に對して、其の正を失はざらしめば、

其の正しきと邪なると、善きと、悪きとの差を見分くること、固より、難からず、斯の如くにして、而して後、見識、始て具はれり謂ふべし。

所謂、道義の心を養ふとは、甚、易からざることにして、古より、人々の、大に、欲して、而かも、得るもの少き所なり。故に、今日にありても、亦、同く、其の難きを知るべきなり。然れども、其の難易は、姑く措き、人たるものゝ、此の世道を履み行くに方りて、日常の事毎に、其の必要を感ずるものなれば、必、心を留めずては、得あるまじきことなり。

蓋、人の相交際するに當りて、其の情義の、相互に通ずるものは、各、其の誠を盡くして、互よ、其の心を推し測り、其の親愛和合の道を失はざらんことを計ればなり。若、各、己の欲する所をなして、少も、相譲ることなければ、則、其の平

和は、必、敗れ、其の交情は、必、睦からざるや、明かなり。故に、彼の、己の欲せざる所は、人に施すことなかれ、との心を以て、事の善惡是非を明かにし、必、善に從ひ、是に就き、人を害せず、己を欺かず、能く義理を正して、爲すべきと、爲すべからざるとを察し、正きを近け、邪なるを斥けて、大小の事、悉く、其の義理の正きに據りて、之を行ふときは、事、皆、其の宜きに適ひ、交誼、常に、其の和を失はず、而して、其の精神の存する所、既に、道義の中を得て、可ならざる所なければ、則、世に處し、事に處するの道、亦、難き所を見ざるなり。

然れども、其の善惡、是非、正邪を、明に見分け得るに至るは、則、見識の養成に於いて、大に、心を用ゐたる結果なれば、必、學問と、體驗と、相待ちて、

古今に鑑み、義理に徴し、自他の、正邪を、詳に、知り得るに至るなり。斯くて、其の精神を、固くして、萬事に際する毎に、能く、義に從ひ、不義に遠かるときは、交際の秩序亂れず、親愛の情誼全く、禮讓威儀、共に、其の宜きを得るや、明なり。若、夫、正邪、是非の詳かなるは、他日、之を論ぜんとす。

論説

徳川時代女子教育史評論（三）

岡崎遠光

二、同時代女子教育の要概（上）

普通一般の觀察によれば、徳川時代の女子が、養成薫陶せられしは、女大學の如き、儒教主義と、實語教の如き、佛教臭味との混合したる、教育法に基きし

ものゝ如し。神道者流が、女子に、我が國の大道を知らしめむとして、假名文字もて、簡明に、論述したる、經典樣の書籍も、多少、女子をして、修身、齊家の方便を訓練せしめしに、相違なきも、一般の男子が、前二敎に感化せられし事の、多く、且、舊きを以て、女子も、自然、女論語、柳氏女範、若くは、因果應報の理に、薫陶せられ、安心立命の地は、夫に順ふ事と、名號を唱ふとの、二ッより、得らるゝものと、思へり。

然れども、此の二敎外にて、人情風俗に、關係する事物が、識らざるうちに、女子の思想、習慣を支配したりし事の大なるあり。又、たとひ、儒や、佛は、當時、一般の道德の標準を示しゝものゝ如しとはいへども、是とても、女子に對しては、學校樣のもの、極めて、尠く、且、何れも、單に、其の身を修むる事の

みを說きて、更に、其の知識を發達せしめむ、との方法とては無く、「才ある女は、夫を輕むじ、人にゝくまる」といふ前提を、教へ込むより、女子の思想の發達は、彼等、自、他の方向より收得したり。即、ゆかしき音樂、おもしき小說、うつくしき畫、ひなびたる俗謠、若くは、演劇なんどいふ事が、當時の女子社會に、大なる影響を及ぼしたりしは、明白なり。音樂の中にて、琵琶、琴、笛等の如きは、既に、上代より、女子社會に行はれ、其の音調が、女子の心意に、調和を與へ、其の文意が、女子の感情を刺衝し、以て、思想、習慣を養成せり。後世に至り、彼の三絃線の類、初は、下等社會にのみ行はれて、上等の生活をなす士大夫は、之を擯斥し、鄭聲視したりしも、雜草は、生じ易き例にて、終には、上等社會の玩物となり、諸侯の姫君さへ、これを調べて、家庭の娯樂となし

ぬ。』風を移し、俗を易るは、樂よりよきはなし。』故に、『淫哇の詞、多く、倡優の習ふ所』といはれたる音樂が、如何ばかり、當時の人情、風俗を汚しゝかは、吾人の、今日、豫想し得る所にあらず。本居宣長翁、其の著玉勝間に、『或人の、今の世、洽く弄ぶれる三線といふ琴を、かきたる繪に、歌よみて書け、と請ひける、其は、今様の戯れたる物にて、古好む徒などは、いやしむる筋のものなれば、いかにぞや、傍痛く覺えけれど、さもいなみがたき人の、いふことなりければ、いかがはせんま、よみて書ける歌。

きかせばや古人にみつのをの、みつの調を心ひくやと。』此の翁の文意によるも、三絃は、吾が國の俗樂にして、決して、貴人君子の玩ふものにあらさりしを、尙武の氣象衰へて、文弱の弊風吹き荒む世となりては、琴、三絃、鼓弓等、

盛に行はれ、中にも、三絃、第一、俗耳に入りて、諷化、政教の害をなしたり。然れども、謠伎、其の能を正し、作工、其の器を撰び、忠信孝貞の事跡を奏する事にせば、吾人は、此の樂器の、長く傳はらむ事を望むものなり。此の如く、徳川時代の士女が、俗樂の爲に、多少、損害を受けたると、同時に、又、正樂の爲、識らざる中に、家庭の和樂を得たるも、尠からずして、大抵、當時の女子讀本には、いとたけ、ゑ、茶の事を、女子の修得すべき學課と見做しぬ。

又、小説類は、女子の作にてすら、源氏物語の如き、空前絶後の傑作あることなれば、女子の性質は、一般に、此の種の美文學を好む傾向ありて、女子の黒棚には、大抵、伊勢、竹取、源氏、狹衣の類を載せたり。且つ是等は、文字は、假名文字、詞は、大和詞にて、保守の性に富むといふ、女子には書物そのものが、適

當したれば、中等社會以上の婦女にて、學才のある限は、是等を愛讀せり。愛讀せるが故に、終には、其の感化を受けて、書中の人物に、訓育せられたり。然れども、源氏、狹衣の類は、寺小屋にて、漸く、半年、一年位の手習をなしたる、婦女輩の、能く、了解し得る處にあらざるを以て、徳川の初の頃は、足利の末に、産出せし、至つて、簡單なる、鼠草紙の類、極めて、勢力を得たり。是、宛明治の今日、『やまと新聞』の如き、俗調平易なるものが、下等社會に愛讀せらるるが如し。此の種の小說は、材料は、平俗なれど、自然、面白味ありて、其の滑稽的なる處など、思想、理想何れも、單純なりし、婦女子に對しては、此上なき娛樂の友となりたり。故に、是等は、源氏、狹衣の如く、日本の文學上に、別段の利益なかりしと同時に、又之に感化せらるゝも、源氏、狹衣に感化せらるゝ如

き、損害とてはなかりき、然るに、其の後に至り、春水の一派が、妙を釣り、奇を衒ひて、猥褻極る言語、文章を綴りたる、物の本に至りては、其婦女社會に、一種の蠱害を與へたりしは、官より、之を嚴禁せるを見ても、知り得べし。次に、繪畫は、彼の山水の美景を描き出したるものは、勿論、人情、風俗を壞亂する恐れなく、却りて、日本の婦女、優美の天性を豊富ならしむる功益ありと雖、彼の錦畫といはるゝ類に至りては、婦女、淫奔の媒介となるもの少からず。且、俳優の肖像、娼妓の容貌などが、當時の男女をして、往々、正業を怠り、彝倫をやぶる楷段となりしは、古人の書籍に、散見せり。俗謡は、其の人情を寫す事の巧みなると、其の樂章の時好に適せるとによりて、非常に、世人の喝采を得たりしかば、諸侯、士大夫の家にてさへ、其の名手を、我が家に招きて、謡はしめし事

もありし程なれば、之が爲に、善き詞は、善きなり、惡き謠は、惡きなりと、其の聞き手の心意を感動せしめたり。殊に、當時代の如く、事業心なき婦女は、殊更、此の技藝に嗜好ありければ、中等以下の女子は、自、此の技を修得し、其の父母も、亦、文字上の智識を得せしむるよりは、寧ろ俗謠に練達せしめて、其の生活の助けとなさむとせり。今日にても、此の傾向あるは、世人の、既に知る所なり。昔は、演劇といへば、下等なる商賣、俳優といへば、乞食より、稍、上等位のものと、見做しゝを以て、諸侯の婦女などは、さすがに、之を、見物する事能はざりしと雖、俳優は、巧に、紅白を粉して、其の容貌、艶に、やさしき處より、劣等の女子が、其の金錢を費し、其の品行を誤りたりしは、其の演劇が、勸善懲惡といふ主意たりしにも拘はらず、非常に、風俗を害したるものなりき。

教育の方法、未、發達せざる時代に於ては、學校よりは、寧、社會の感化力が、其の兒童を養成する事多しとの考より、前數個の感化力を述べたり。必竟、德川時代の兒童は、教育を專門にする、完全なる學校なかりし故に、社會百千の事物が、教育、陶化の道を行ひつゝありしなり。

教育の事に就いて女教師に望む所あり

大林弘一郎

教育の事に就いては、世上、頗、之を憂慮するもの多く、隨ひて、此が良法も、案出せらるゝことなれども、猶、未、予輩をして、慊然たらしむること能はざるものあるは、女子教育、殊に、女教師養成に關する方法の、未、完全せざる所あるも

の是なり。

凡、教育の容易ならざると、教師の良ならざるべからざるとは、世人、既に、之を知れりと雖、信に、其の實際に就いて、其の弊を探るに至りては、亦、甚、易からざるものあり。故に、或は、其の弊とする所も、未、其の當を得ざるものあり。又、利を論じて、未、其の宜きに適はざるものあり。然れども、亦、各、一の見る所なくばあらず、要するに、其の好む所、主とする所に偏するものあれはなり。予輩の論ずる所も、亦、或は、偏する所なきに非ざるべし。然れども、其の大體の上に就いて、見る所のものは、必しも、大なる過なからんことを信ずるなり。

元來、教育の要は、人の智德を、發育養成するにあるものなれば、常に、此の事に

從ふものは、勿論、現に、敎育を受けつゝありて、將來、此の事に從はんとするものは、必ず、大に、其の本領を究めざるべからざることなり。即ち、左の要項を以て、其の身の本分とせざるべからず。

一、既に、敎育に從事するものは、兒童子女の心身を擧て、皆、已の敎養保護に歸するものなれば、其の結果の、良不良は、全く、其の當局者の責たるべきこと。

一、未だ、學校にありて、將來、敎育者たらんとする女子たるもの、其の志を純正にして、專ら、眞正の敎育者たらんことを期すべきこと。

此の二項は、固より、敎育者の常に、口にする所なり。然るに、之が實行如何を察するときは、則ち、十一を千百中に存するに過ぎざるなり。故に、予輩は、常

に、此に憂慮を抱くもの淺々ならざるなり。而して、今・特に、其の女子に係るものを論ぜんとするなり。

抑、敎育の事業は、終身、心力を勞すべきものにして、一朝、好事の爲、將、射利の爲にすべき事にあらざるは、固より、論を待ざるなり。然るに、世上、往々、此の本旨を喪ひ、或は、之を解せざるの敎育者さへあるは、實に、慨嘆に堪へざる所なり。是に於いてか、第一項の論ぜざるべからざることを感じたり。

敎育者の兒童子女に於ける、其の敎養の責あるが上に、撫育の責あることとなれば、其の任の重、且、大なるや、明かなり。故に、終身の事業とし、畢生の力を致さゞるべからざるは、固より、敎育者の覺悟すべき所なり。然らざれば、將來に、多望なる人物を養成し、有爲なる國民を鎔造すべき、大責任を全うし、人の貴重

なる子女をして、其の方向を誤らず、其の智徳を全からしむること能はざるなり。然るに、今日の教育社界、一般の情態を觀るに、概、其の心志を、此に、專ませざるもの多く、隨ひて、其の教育上に現出する結果も、亦、甚、好良ならざるものあるは、爭ふべからざる事實なれば、教育法の不完全なるよりも、寧、教員其の人の咎たらざるを得ず、殊に、婦女子の子女を教育するは、其の事、甚、適當なれども、婦人の特質として、大躰の上に就いて、注意を加はふるもの、甚、稀に、且、其の就職の目的、單に、一身の利を計るにあるもののさへありて、重要なる教育の大本領に通達せざるもの、決して、其の尠少ならざるを知るべし。然らば、其の弊の及ぶ所、必、子女の將來にありて、甚、輕からず。これ、大に、其の反正を望まざるべからざる所なり。次には、又、此等の教師の教を受けて、進歩發達した

る子女にして、高等なる學校に入り、修學の後、又、教育界に出でんとする女子は、大に、其の本志を誤るものなきに非ずと信ず、縱令、皆、然らざるも、十中の八九は、必、前述の弊あるを免れざるなり。故に、余輩は、將來、女教師たらんとする女子に向つて、第二項の如く、其の心志を純正にして、心力の全部を擧て、之を教育に盡くし、專、身の爲、利の爲に計るが如き、陋風卑俗を一掃し、必、教育の本旨を實行し、縱令、身は、其の職に就くとも、又、其の職を罷むるとも、終始變らず、人の子を毀り損せざることを、豫、心に措かざるべからず、然らざれば、眞正の教育者たることを能はずして、唯、其の本領を失ふのみならず、大に、世を害し、人を誤るに至るべし。豈愼思せざるべけんや。

女教員の子女教育上に必要なるは、固より論なしと雖、前述の大病を除去せざ

れば、却りて、子女をして、卑俗の域に陥らしむるの恐あり、事態、甚、輕からざるなり、故に、現に修學しつゝある所の、將來の敎師たる望を懷くものは、最、深く其の心志を定むるに注意せざるべからず。これ、敎育の大體に就いて、少も忽にすべからざる所なれば、其の修むる所の學科の如何に關せず、必、其の精神を存養して、以て國家の敎育を補益する所あらんことを期すべきなり。これ、余輩が大に希望して止まざる所なり。

かくてまた　ふるきにかへる　わがきみの　めぐみをともに　しきしまのみち

（草集[illegible]）

史談

阿立阿際

鹽井雨江

眼しあらバ、見よや。姫たち、玉敷の都大路にも瓦礫あり。おどろなす荒山奥にも、名玉あり。心しあらバ、知りね姫たち、道無しといふ鄙の野邊にも、かむバしき名花あり。朝夕に敎正しきみ庭にも、くちをしき名無草あり。名花や、寶玉や、瓦礫や、名無草や、必竟、其の質を問ふべきのみ。其の所をいふべきにあらず。

又、きゝね姫たち。世の人を見よ。錦羅絹綉をまとふも、賤々たる人あり。草衣素服を着くるも、卓々たる人あり。又見よ、金殿玉樓に住むも、牛や馬や、獸畜に似たる人あり。板の小屋、藁の床に起臥するも、聖人や賢人や、世に似ざる所の人あり。又見よ、敎は百家の庭に遊び、學は廣く東西を探ぐると雖、遂に人倫の道を悟らず五常の敎を知らぬ人あり。なか〳〵に、百家といふ一文字も學ばず、世の中の東西を辨へぬも、親に孝、君に忠、兄弟に友、朋友に信、誠の臣民たるの心に恥ぢぬ人あり。又見よ、蓮花の清く美くしげなる容色あるも、心の底は、濁江の水の穢

き人あり。なか〳〵に、幽谷のおどろ〳〵しげなる姿したるも、心の奥には、ゆかしき花の匂ひ、清き月さへすめる人あり。思ふに、人の尊卑、人の優劣、人の美醜、人の人非人、決して容色を問ふべからず、學と不學とを論ずべからず、境遇を見るべからず、唯問ふべきものは心の形なり、見るべきものは心の底なり、論ずべきものは心の奥なり。嗚呼心、心。人は心のみ、他はいふなかれ、きくなかれ、見るべかれ、問ふなかれ、又思ふなかれ。あはれ、日の本のにほふ姫たち、秋津洲の花かぐはしき少女たち、我いふ言の葉を疑はゞ、古今の史談を見よ。おのれ又此に一の物語りあり。

徳川幕府の頃、寛政の末、享和の初めつ方、今は北海道、昔は蝦夷、北のはてなる部のわたり、鍛治村といふ所に、阿立阿際といふ、世に珍らしき二孝女ありけり。

當時、蝦夷地に住める者のありさまをいはゞ、土人は獸に遠からずといはゞ、又今更に記さずもたれり、土人にあらぬ人の有様を聞くに、又、僅に耕する事を知りたるのみにて、大方は野に獸を狩り、濱に魚を漁り、肉あれども飽き、肉盡きなば飢ゑ、糸つくる事もせねど、布織る業もえせず。狐貂の皮を被ふり、或は、草を束ねたる

をまとひ、家といふものは黒木をさしかけ、草また昆布などを、屋根に葺き、壁に張りたる小屋。さかも、床といふものなく、疊などいふもの、いかであるべうもあらず。土の上に、枯草の刈りたるを敷きて、其の上に起臥するといふ有様、思へどむざんあさましきさま。斯くても人といふ者住めるなりけり。當時世の人、蝦夷としいへど、熊鷲猛き獣鳥ならでは、捿む者なしと思ひたるも、道理なり。

衣食住さへ、かゝる低き姿なりければ、敎へとやらむ、道とやらむ、學とやらむ、さる高きあたりのものは、冬の夜の螢、夏の夜の雪、望むべくもおぼえず。げに見るべうもあらず。西東茂るは唯荊棘、名も知らぬ草木。此のあやしき蝦夷、此の荊棘の中に、かゝる名花、かゝる孝女の出でける事こそ、其の上の人も、いかばかりかゆかしくや思ひけむ。今聞きて、此に書かんずるおのれだも、ゆかしくなつかしく悲しく、はては、涙のこぼれて、紙の端一雫二雫ぬらすも、心の露。

お立といふは、勘之亟といふ者の妻にて、夫婦が最愛の一女、やがて、其の阿際といふ孝女なりけり。家にはなは、勘之亟には父母、阿際には祖父母なりける人の、八十歳ばかりに成りたるが、露の命消えがてに、臥起したまふがありけり。勘之亟は、

いつしか兎角に病み勝ちと成り、はか〲しき營みも叶はず、起きつ臥しつしては、甲斐なき身を恨むのみなる年月も數多に成りぬ。さらぬだに、貧しくて、常に朝暮春秋の營みに苦しむ事多くて、家に貯畜といふものなかりければ、一家五人、衣食やゝもすれバ欠き、朝夕やゝもすれバ、乏しからむバかりなりけるを、あはれ氣なげなりけるかなお立。わきてやさしかりきは、お際。

阿際、年漸く十六歳、世にいふ二八可憐の花。されど、あはれやお際。春風春雨知らぬ者の如く、又捨て顧みず。げにや、人のはやすなる十六夜可哀の月。されど、いとはしやお際、むなしく雲霧にまかして、惜しみもせず怨みもあらず。母阿立と二人、代る〲、一人は殘りて、内にかしづき、一人は行きて、外にいそしむ事と定め、母のお立の家に在る時は、阿際は、近き荒田を鋤き、ほとりの濱に漁り、雨に打たれて、草衣の朽ちんずるを忘れ、風に吹かれ墨髪の亂るゝを厭はず、母の阿立出でゝ濱邊に濡れ野にやつるゝの日は、阿際は家に留りて、祖父母の老體を勞り、多病の父を慰め、看護にやつれて、肢肉の痩せんとするも知らず、介抱につかれて、心胃の細りゆくをも忘れ、孜々ます〱勤めざるものある如く、急々いよ〱及ぼ

ざらむ事を怖れたる、お立も孝貞、お際も至孝の限りなりけり。耕作の暇ある毎には、人に傭はれて勞働しては、いさゝかなる賃銀をうけ、一日として空しく、我が心骨を安んせず、終日働き、終月務め、終年いろしむも、我が衣服の爲めにあらず、我が朝夕の爲めにあらず、唯思ふ所は、祖父母に父に孝養欠くべからず、父母に夫に孝貞の道戻るべからずと思ふ心のみなりけり。

岡際の家も、さきにいひたる海藻の屋根、丸木の小屋、土を床なるあさましの家。雨雪は牀邊に狂ひ、風霜は枕頭に叫び、武藏野の風に草をかたしくも、信濃路の雪に岩を褥とするも、これに比べなば、玉帳を重さね、絹床を積みたる思ひすらむ。こを起臥の習ひとしたれど、朝夕に思ふ事無きに似たれど、孝女の心中は、もと尋常の情にあらず、賤々たる世上の習ひに似ざる者、人に優れて思ひ、人に越えて悲むが孝女の情、何にしか思ふ事無くてかは。冬としなれど、殊更に孝女の苦心焦慮。冬の日は、爐邊に稗稈を敷きて、僅に祖父母父母を坐せしめ、肩を摩し、背を撫でんとするにも、我手の冷かならむ事を恐れて、先づ火を燃やして我手を温め、さて後よ撫摩して息ます、夜は、おどろ眞柴、さては木の根、火を殷にして寒氣を防ぎ、

半夜、祖父母も眠り、病父もやすめど、お立お際は、代る〳〵眠らず、邊りに座して、火の絶えぬやう、爐に心を配り、眠れる人の塞むからぬやう、打ち看りて、終宵眠らず、眠らで曉に至り、曉に起きては、終日休まず、北窓の風吹かぬ日はあるも、南窓に孜々たらざる日はなかりけり。

母なる阿立は、健のやう見ゆれど、人世の坂、既に半を上りて、昔日のやすけきに似ず。かてゝ羊腸たる山路に薪炭の苦、逆波よせかへす浦わに、衣食の勞、いかでか苦しくやましまさむ、なにばかり辛くやおはしまさむ。こも思へど、お際の悲嘆、又更に悲嘆の思ひまさゝるを得ず。草衣の袂の露、又更に露を添へざるを得ず。薪炭の苦、衣食の勞、かばかりに母の焦慮心病、若し母の心骨を摧き盡くすやうあらむには、我身の罪は逃るべうもあらず、祖父母に父に盡くし奉る孝養も、又さある時は、盡くしたりといふべからじと思ひて、母なる人の苦勞の、つとめ少からむやうせんと思へば、阿際は、其の身の家に留るべき日も、風あらじと知れど、母を留めて、おのれ浦にあさり、野に耕し、又おのれ眠るべき夜半も、雪深く霜はげしとおもへど、おのれは眠らで、母をやすましむるやうつとめぬ。又夜毎、祖父母た

ちのやすらかに、眠りたる後は、必ず母を撫て母を摩りて、母の勞苦を勞りしをいふ。雨江、記して此處に至り、思はず感涙欄干、墨すれども／＼、にじむをおぼえぬ。讀まむ人々、筆の鈍がちなるをなとがめそ。

此の頃、年々不漁のみ打ち續きて、お際の一家の住める一村、日につかれ、月に窮し、年に衰へ行きて、一村又朝炊暮煙を見ず。遂に金を官に借る事となりて、お際の家も、官より一兩を給せらるゝ事となれり。

勘之亟といふも、又天質至孝の者なりけり。官の給せんといふ一兩、其の半を請ひ受け、家に歸るや、直に父清次郎に進め、父の思ふ所の物、求められむ事を乞へり。清次郎聽かずして曰く、汝らが歲月の孝養、身にあまり／＼て、余、又願ふ所のものも無し、欲する事もあらじな、時既に歲晩、費用も又多からむ。歲をおくるの費にせよといひけれど、勘之亟頻りに進めて曰く、おのれが身、助くるに貞操の妻あり。至孝の女あり。幸に、とまれかくまれ、父上母上を養ひ奉てあれど、おのれが多病、孝養はなほ、萬分の一も思ふやうならず、わが共に送らむと思ふは、父上母上の歲のみ。わが共に迎へんと思ふも、父上母上の新年のみ。それならで、用ゐる

所もあらじとて、頻りにすゝめしかど、清次郎も辭みかねて、いふがまゝに受け、さて直に孫なりけるお際をよび、汝が歳月の孝養、我を朝に撫で夕に摩り、我立てバ勞り居れバ慰め、汝が身も汝が姿も、更に顧みぬ孝情、汝れを見る毎に、感涙は我胸に千滴。こを今汝に與へむに、春立つも間もあらじ、新しき衣にても求めよ。汝が美しき姿見んか、我春を迎へむ悦びなりといひければ、お際は唯々として辭まず、悦びて賜はり、それもて米鹽を買ひ、又袷衣一を求め、祖父の賜ものなりとて、身にまとひて悦び、箱に納めて悦びたり。

寒風は唯ならぬ北地。世にいふ北山おろしも、これに比べなを、南山の暖風にすぎぬ、北氷の風北地の雪、いやましにきびしく、皮膚も氷るバかりとなれる頃、可憐やお際、可愛やお際。昨日けふ身を離さず、うれしげなりける袷衣を解きて、祖父に着さしめ、あだし少女は、春衣をきかざりて、よろこべるが中に、阿際は獨り、草衣をまとひて、更に愧づる色なく、祖父が暖げなる姿を見て、よろこびしといふ。前には、祖父の心のまゝに、悦びて春衣を求め露バかり祖父の心に抗せず。今又寒風のきびしきをおぼゆるや、孝養の材にあてゝよろこぶ。孝女の衷情、天の高きに

至れり、地の長さに渡れり。いかで、天動かざるべき、地響かざるべき。箱館奉行戸川安論、此の事を聞きて、直にお際の孝お立の貞を稱し、二女は銀十錠を賜はり、祖父母は終身、月毎に白米を賜はりしといふ。其後、阿際は、南部三戸といふ所の人三郎といふ者を、壻に迎へたるが、此の三郎、又至孝、よく祖父母父母に仕へたりといふ。

雨江筆を止めて、感涙又欄干、大呼して阿際お立とよぶもの三度。又可憐可愛可稱と絶叫するもの三度、退て又長嘆息す。神州幾萬の好令孃、雨江が此の嘆息の意を知るや否や。嗚呼。

江田勝子

藤原忠義

江田勝子といへるは、備前國岡山の人にて、江田房長といへるが女なり。生まれて穎悟くして、長となるに及びて、容貌、最目出度、學問にも通じたり。寶暦八年の頃備中の都羅島西浦なる三宅由將といへるよ歸きぬ。其の姑に事へて、能く恭順の禮に從ひ、頗、其の歡を得たり、其の平常の起坐も人に勝れて、靜かなりしかバ、鄉里

の人々、皆之を稱しあへり。由將病に罹りて、遂に失せにけるに、其の子なかりけれど、姑は其の親族とも相謀りて、由將の季の弟なる等公を以て、嗣となし、勝子を之に配はさんとして、人して、勝子に其の意を諭とさしめけれど、勝子は、其の心の拒み難きを知りて、遂に、其の家人の在らざりしを時とし、室に入りて、衣を着更へ、劍に伏して失せぬ。其の姑は、大に驚きて之を救ひしかども、終に及ぶことなかりし。勝子は、かねて、絶命の辭を書し置きけるとぞ。その辭に、

夫、一婦人にして、二夫に事ふ、醜これより大なるはなし。況や、彝倫を穢瀆に於いてをや。何の面目ありてか良人に地下に見えん。

と。時に、勝子は、年二十九なりと。遂に、由將の墓に合せ葬りしとぞ。

あはれ、此の書き遺したりし、一片の文を見て、勝子の心の中の淸々しく、其の操を守の固きは知られぬ。斯くてぞ其の學し道の光も顯はるれ。且、其の死も節を立てんが爲に、已むを得ざるの死なれば、實に、其の所を得たるものなり。世の其の節を失ふもの、勝子の行を聞かば、亦、愧ぢ死すべきか。

家政

看護法捷徑（四十）

三笠舍主人

第五編　傳染病の心得方（つゞき）

（五）實布的里亞

一實布的里亞は、最も恐るべき傳染病にして、之に罹る時は、先ず咽頭、及其兩側にある扁桃腺、（咽頭の兩側にある、不正圓形の塊肉、）腫脹し、灰白色の皮膜にて、其面を被ふ、故に開口せしめて、咽頭を撿すれば、其部胞脹して、汚穢白色を顯はすを見る。又前頸の上部、則顎の下を捜れる時は、其部に、瘰癧を觸るべし。其外臟下に當て、咽喉に劇しき痛を覺へ。又、多く熱發す。

二此病は、甚危險にして、死を招く事多きものなれど、上の如き容體ある時は、速に醫の治を請ふべし。又患者は速に別室に移して、嚴に交通を斷ち、衣服、器具等、一切別に爲すべし。

三本病に罹りたるものゝ消毒は、概ね左の項に據て行ふべし。

唾液、及痰は、石炭酸水、(分量前に出づ)を盛りたる、壺中に咯出せしめたる後、之を焼くか、若くは深く土中に埋むべし。

被服、器具等にして病毒の附きたるもの、若くは汚れたる疑あるものは、熱氣消毒法、若くは、煮沸消毒法を行ひ、又は二十四時間、乃至四十八時間、石炭酸水に浸したる後、清水にて十分に洗ふべし。尤汚染甚しきものは、燒却すべし。

家屋は、通氣消毒法、及乾燥消毒法を、行ふべし。其外室内の器具等は、總て十分日熱に曝すべし。

(六)　格呂布(馬脾風)

一此病は、多く小兒に發するものなれども、時として、亦大人も之に罹る事有。最初は、一種の咳、噴嚔、流涕、鼻汁流出、不眠、等の症を發し、一二日の後、特に夜間に於て、呼吸困難、苦悶を發し、一度耳にする時は、復た誤認すべからざる、一種吠るが如き咳を發す。此時、患兒の顏面潮紅し、聲音嗄嘶して、苦悶甚しく、頻りに兩手を頸圍に致して、氣道内の梗塞物を、除去らんとするが如き擧動を爲す、既にして發作緩解すれど、全く無患と爲り、翌夜に至りて、復た發作

す。

二右の如き本病の前兆たる咳嗽を發する時は、速に醫の診を乞ふべし。時刻を移す時は、病勢速に增進するものなり。醫の來るまでには、身體を溫にして、風氣に觸れしめず、一室に靜臥せしめ、溫き葛湯、若くは護謨漿の類を、飮ましむべし。又、頸圍に溫濕罨法(前の出)を施し、或は水蛭數條を貼するも可也、此等は皆、一時の手當に不過、速に醫治を請ふべし。

三格呂布患者は、一室に別居せしめて、健康人との交通を斷ち、飮食、被服、器具、等總て患者用を區別して他より混用すべからず。其外の心得方、概ね實布的里亞に同じ。

移ろはぬ
心の深くありければ
こゝらちる花
春にあへるごと
(後撰集)

漫録

あらずもかな　(第六)

鹽井雨江

(十一)女子が、俳優の容姿を、喃々批評したらむは、玉の如く璧の如く、やんごとなき姫君も、さながら、河原乞食のやうおぼえ、魚骨殘飯を取らして、門前より、追ひ掃はまほしき心地せられ、花の如く月の如き、美しき令孃も、俄に馬の脚のやう見え、鞭あらば、一鞭あてゝ、懲らさまほしうおぼえて、あらずもかな。なるは、女子が俳優の批評。

(十二)近眼にもあらず病眼にもあらぬ女子が、養生眼鏡とやらむいひて、青色の眼鏡、あるは、赤色の眼鏡など懸けたるは、赤髮青眼の濁りはてたる異國人にこそ、似つかはしき方あれ、此の神洲の土地、此の潔白の土地に生れ、此の神洲潔白の水をむすび飯をくひ、此の神洲潔白の土と成らむ、眞に神洲潔白の令孃には、さる眼鏡は露むかり似づかはしからず、ふさはしからず。あらずもなか、無からずもかな。

かゝる眼鏡もて書を讀み、文字を習ひ、道を尋ね、敎へを聽くが故に、誠に此の神洲潔白の、神ながらの女子の道の見ねずやあらむ。あなかしこ、令孃の赤眼鏡青眼鏡あらずもかな。

(十三)女子が、他人の美醜、他人の賢愚、他人の

善悪、猥りに論ひたる、あらずもがななり。美とやらむ、賢とやらむ、善とやらむ、よき方に、他人を評めしたらむも、言葉多く、静かながらずおぼえて、あらずもがななり。ましてや、醜しとやらむ、愚なりとやらむ、悪しゝとやらむ、悪しき方に、評めしたらむは、柔しからず、暴々しく、亂りがましく思はれて、あらずもがなの限りなり。他人を醜しといふは、おのれの醜きより醜く、他人を愚なりといふは、おのれ愚なるよりも愚に、他人を悪しゝといふは、おのれ悪しからむより、悪しくおぼゆ。女子は、やさしくもの静かなるがよけれど、他人の醜きを見たらむには、心の中にあはれみたらむがよく、他人の愚なるを知りたらむには、唯、おのれの心は如何にと、顧みたらむがあはれに、又他人の悪しきをきゝたらむには、心の中に退けて、おのれは近づかぬやうせたらむか、をかしといひて笑ひたらむよりも、にくしといひて責めたらむよりも、誠に他人を論ふ道に叶ひたらむ。さは又、女子の柔しきもの、静かなるべき教にも、叶ひたらむとおぼゆ。

人はそうじて、奥ゆかしきが、あはれ　ましてや、女子は、奥ゆかしきが、上も無くめでたかれ。猥りに笑ひ、猥りに詈り、猥りに謗りたらむは、心の底の深からず、浅く狹く、奥ゆかしからぬけしき見えて、あらずもがな、無からずもがな。

(十四)女子の馬に乘れるも、あらずもがな。あはれ馬にめさるゝは、馬のとび馬の馳ける事が、面白く愉快なれだにや。或は活潑とやらむ、亂暴と

やらむにて、人を驚かし賜はんとにやある。さらば、雨江謹で妙策を献せむ。馬に乗り賜はむより、親ら馬と成りて、大路をとび、大路を駈り給はむ方、一層面白く愉快ならむ、又活潑亂暴、一層人を驚すらむ。故に馬に乗るを廢めて、親ら馬に成り給へ。げに妙策にあらずや。雨江豈に、女子を愛せざる者あらむや。此の妙策を献じて、敢て平生の失言暴筆を償はむとす。嗚呼。

あうむ文學（八）

楢の舍主人

俊頼卿の見識

歌學に委しきものは、詠歌に巧ならず。詠歌に巧なるものは、歌學に委しからず。兩者相兼ねて卓

拔なるものは、到底望むべからざるものか。顯昭は、大才にして詠歌に巧ならず。寂蓮は、無才學にして詠歌に巧なり。顯昭いはく、歌は容易なり。寂蓮の如き無才學者も、歌をもよくよむ。寂蓮いはく、歌は大事なるよ。彼の如き大才も、歌は甚拙しと。この評語、一般歌人に適用するも、毫も失當にあらざるべし。卿が詠歌は、一世に傑出し、後代に聳動するものありと雖も、歌學に至りては、誤謬甚多くして、其俊頼朝臣の上に立たんこと難かるべく、顯昭法橋の洞達に及ぶこと能はず。俊頼朝臣と申す歌仙の口傳といふものあり。事廣くして誤多し。と辨入道が傳説を受けて記せるは、古人既に看破するところあればなるべし。卿いはく、大かた歌のよきといふは、心をさきとしてめ

つらしきふしをもとめ、詞をかざりよむべきなり。心あれども詞かざらざれど、歌おもてめでたしとも聞えず。詞かざりたれども、させるふしなけれど、よしともきこえず。めでたきふしあれども、優なる心詞ぐせねば、又わろし。けだかくとほしろき、一のことゝすべし。これらを具したる歌は、世のすゑには、おぼろけの人はおもひかくべきにもあらず。金玉集といふものあり。その集などの歌こそは、それらをぐしたる歌なんめれ。それを御覧じて、御こゝろを得させたまふべきなり。とて、摸範となすべき歌、十首を擧げられたり。即、

袖ひぢてむすびし水のこほれるを
　はるたつけふの風やとくらん

はるたつといふ計にやみよしのゝ
　山もかすみてけさは見ゆらん

ほの〳〵とあかしの浦のあさ風に
　島かくれ行くふねをしぞ思ふ

さくらちる木の下風はさむからで
　空にしられぬゆきぞふりける

戀せじとみたらし川にせしみそぎ
　かみはうけずもなりにける哉

もみぢせぬときはの山にすむ鹿は
　おのれなきてや秋をしるらん

頼めつゝ來ぬ夜數多になりぬれば
　またじと思ふは待つに勝れる

よしの川いはなみたかく行く水の
　はやくぞ人をおもひそめてし

わかの浦に汐みちくれば潟をなみ
　あしべをさして鶴なきわたる

等にして、この中、たのめつゝ、よしの川の二首を除きては、悉く金玉集に入れられたる歌なり。金玉集は、大納言公任卿の編輯にかゝり、その調甚高しと雖も、餘情の點に於ては、少しく欠くるところなきにあらず。但、ほのぼのと、はるたつとの二首は、言葉たへにしてあまり心さへあるなり、とて、上品上におかれたり。卿が本尊として尊信し、祖師として崇敬するところ、常にこの集にあり。宜なり。その發して詞花となるや、梨華の雨を含むに似て、頗鮮嬌なりと雖も、稍梅枝の妖艶に乏しきものあり。卿の歌體は、實に金玉集の融化したるもの、今こゝにこれが全篇を記して、未、この集を見ざる者のため、特に參考に供へんとす。

春たつときゝつるからにかすが山
　きえあへぬ雪の花とみゆらん
はるたつといふ計にやみよしのゝ
　山もかすみてけさはみゆらん
みよしのゝ山のしら雪いつきえて
　けさはかすみのたちかはる覧
うぐひすの聲なかりせば雪きえぬ
　山ざといかではるをしらまし
谷川にとくることほりのひまごとに
　うちいづる浪やはるのはつ花
春のよのやみはあやなしうめの花
　いろこそ見えね香やは隱るゝ

我せこにみせんとおもひし梅の花
それともみえず雪のふれゝば

子日する野への小松のなかりせば
ちよのためしに何をひかまし

ちとせまでかぎれる松も今年より
君にひかれてよろづ代やへん

行きてみぬ人もしのべと春の野の
かたみにつめる若菜なりけり

やかずとも草は萠えなん春日野を
たゞ春の日にまかせたらなん

木の本を住處とすればおのづから
はなみる人となりぬべきかな

山たかみくもゐにみゆるさくら花
こゝろのゆきて折ぬ日ぞなき

さくらちる木の下風はさむからで
空にしられぬゆきぞふりける

世中にたえてさくらのなかりせば
春のこゝろはのどけからまし

わがやどの花みがてらに來る人は
散りなん後ぞこひしかるべき

春の野にあさるきゞすの妻ごひに
おのがありかを人にしれつゝ

おもふことありてこそゆけ春霞
道さまたげにたちかくすらん

ちりちらずきかまほしきを故郷の
花みてかへるひともおはなん

いにしへはちるをや人の惜みけん
今ははなこそむかしこふらし

はるきては人もとひける山ざとは
　花こそやどのあるじなりけれ
花もみなちりぬるやとは行く春の
　ふる郷とこそなりぬべらなれ
行きやらで山路暮しつほとゝぎす
　いまひと聲のきかまほしさに
さよ更てね覺ざりせばほとゝぎす
　人づてにこそきくべかりけれ
あふさかのせきの淸水に影みえて
　今やひくらんもちづきのこま
逢坂のせきのいはかどふみならし
　やまたちいづるきり原のこま
かりふくときくよ心のみなぬれど
　我たもとにもよせじとぞ思ふ

河霧のふもとをこめてたちぬれば
　そらにぞ秋のやまはみえける
もみぢせぬときはの山にすむ鹿は
　おのれなきてや秋をしるらん
見る人もなくてちりぬるおく山の
　もみぢはよるのにしきなり鳧
暮れて行く秋のかたみにおく物は
　我もとゆひの霜にぞありける
心あてに折らばやをらんはつ霜の
　おきまとはせるしらぎくの花
たつ田川もみぢ葉ながる神なびの
　みむろのやまに時雨ふるらし
夕ざればさはの河原のかはぎりに
　ともまとはせる千鳥なくなり

思ひかねいもがりゆけば冬の夜の
　川かぜさむみちどりなくなり
夜を寒みね覺てきけばをしぞなく
　はらいもあへず霜やおくらん
みやまには霰ふるらしとやまなる
　まさきのかつら色つきにけり
みよしのゝやまの白雪つもるらし
　ふる郷さむくなりまさるなり
かぞふれば我身ぞつもる年つきを
　おくりむかふと何いそぐらん
わが戀はむなしき空にみちぬらし
　思ひやれども行きかたもなし
戀せじとみたらし川にせしみそぎ
　かみはうけずもなりにける哉

我こひは行方もしらずはてもなし
　あふをかぎりと思ふばかりぞ
人しれずやみなましかばわび乍も
　なき名ぞとだにいはまし物を
今こんといひしはかりになか月の
　ありあけの月を待ちいづる哉
逢事のたえてしなくばなか〳〵に
　ひとをも身をも恨みざらまし
うばたまのやみの現はさだかなる
　夢にいくらもまさらざりけり
ほの〳〵とあかしの浦のあさ霧に
　嶋がくれ行くふねをしぞ思ふ
わかの浦に汐みちくれば潟をなみ
　あしべをさして鶴なきわたる

もかり船今ぞなぎさにきよすなる
　みぎはのたつの聲さわぐなり

世中をなにゝたとへんあさびらき
　こぎ行く船のあとのしらなみ

天の原ふりさけみればかすがなる
　みかさの山にいでしつきかも

いつしかと君にと思ひし若菜をば
　法のためにぞ今日はつみつる

またしらぬひともありけり東路に
　吾も行きてぞすむべかりける

わすられてしばし慰むほどだにも
　いつかは君をゆめならで見ん

君がすむ宿のこずゑをゆく〱と
　かくるゝまでも歸りみしかな

和田の原八十島かけてこぎ出ぬと
　ひとにはつけよあまのつり船

ことのねにみねの松風かよふらし
　何れのをよりしらべそめけん

おもひやる心ばかりはさはらじを
　何へだつらんみねのしらくも

ふぢごろもながすなみだの川水は
　岸にもまさる物にぞありける

思はんと頼めしことはあるものを
　何名はたてじたゞにわすれず

かくばかりへがたくみゆる世中に
　うらやましくもすめる月かな

こゝにだにひかりさやけき秋の月
　雲のうへこそおもひやらるれ

三輪の山いかに待ちみん年ふとも
　たづぬる人もあらじと思へバ

いはばしのよるの契もたえぬべし
　あくるわびしきかつらぎの神

あまくだるあら人神のあひおひを
　思へばひさしすみよしのまつ

きみがへん八百萬代をかぞふれバ
　かつ〳〵けふぞ七日なりける

年ごとの春のわかれをあはれとも
　ひとにおくるゝ人ぞしりける

ありあけのつきの光をまつほどに
　わがよのいたくふけにける哉

いのちだに心にかなふものならば
　何かわかれのかなしからまし

世中はゆめかうつゝかうつゝとも
　夢ともわかずありてなけれバ

ながれてとたのみしことは行末の
　涙のかはをいふにぞありける

使あらバいかで宮處に告げやらん
　けふ白かはのせきはこえぬと

まだしらぬふる郷人はけふまでや
　こんとたのめし暮をまつらん

まちつらん都のひとにあふさかの
　關まできぬとつげやゝらまじ

かせふけバおきつ白なみたつ田山
　夜半にや君がひとりこゆらん

つのくにの長柄の橋もつくるなり
　今はわが身をなにゝたとへん

大ばらやをしほの山のこまつばら
　　はやこだかゝれちよの影みん
戀しさを何につけてかなくさまん
　　ぬる夜なければ夢にだに見ず

日本文學の女傑（二）

山崎庚午

我國の歌道はいと古くより起れりけり。されば紀貫之卿も「この歌あめつちのひらけはじまりける時よりいで來にける、しかはあれども、世につたはることは、ひさかたのあめにしては、したてるひめにはじまり、あらがねのつちにしては、すさのをのみことよりぞおこりける」といはれけり。時を經、代を隔つるにしたがひて、斯道いや榮えて、奈良朝のはじめつかたに至りては、萬葉といふ歌集もいで來て、男子女子の歌に巧なるもの、雲の如く起り、林の如く集まりけり。されどこの後に、歌道いたく衰へたることを、興福寺僧徒の上れる歌にて知れたり。降りて貞觀寛平の頃に至りては、歌道は、こゝに、空前絶後の盛況を呈せり。當時、紀貫之、勅を奉じて古今集を撰ばれた、これより、勅撰の例ひらけたりけり。

萬葉時代は歌の完成時代なり、古今集時代は全盛時代なり。古今時代より、時と共に、漸く歌道の衰微を來たせしと雖、鎌倉時代に入りては、再び中興の盛況を見たり。萬葉時代にも、古今時代にも、それより降りたる時代にも、女流の歌人極めて多かりき、されど、鎌倉時代に於ける如く甚だ

多からず、この時代の女歌人は、男子をも凌がんとせり。

鎌倉時代文壇の一女傑、阿佛尼の傳をかゝぐるに先ちて、こゝに聊か、歌道師範と歌家分派のこととを述べざるべからず。これ、この女傑の全傳に、最も深き關係を有すればなり。

上世は和歌に師範なし、これあるは、僧能因の、橘永愷と云ひける頃、藤原長能に師事せるに始まる。長能は、當時、和歌に高名なりし人なり。永愷これにつきて歌を詠ずるの法を問ふ、長能すなはち、

山ふかみ落ちてつもれるもみぢ葉の
　乾けるうへにしぐれふるなり

といふ歌を示して曰く、この歌、體裁、風姿ともによし、歌を詠む、すべて斯の如くなるべしと。永愷こゝに於て長能に師事す。そのゝち藤原兼實は、藤原清輔に、俊成は、基俊に、鴨の長明は、僧俊惠に師事せり、これ歌學師資の濫觴なり。

藤原基俊、は二條家の遠祖と稱せらるゝ人にして、藤原俊賴とともに、當時に名あり。相共に自家の風體を主張して下らず。基俊の門に俊成を出す、俊成卿は定家卿の父なり。定家は中世の紀貫之にして、歌道中興の祖を以て推さる、藤原家隆は、俊成の門に學び、定家と名を等くす、時人稱して當時の人麻呂といふ。

定家の子、爲家は父祖にも劣らぬ歌人なり。敕を奉じて續後撰和歌集を撰び、また、藤原基通等と共に、續古今和歌集を撰ぶ。爲家三子あり、爲氏、

爲教、爲相といふ。而して、本篇に主人公たる阿佛尼は、實に爲家の妻にして、爲相の母なり。

阿佛尼、

阿佛尼は、從五位下佐渡守度繁の女にして、四條、または、右衛門佐といへり。安嘉門院の侍女なり。剃髪して阿佛といひ、のちに北林の禪尼といふ。嘗つて藤原爲家に嫁して、爲相、爲教等を生む。才學ありて、ことに歌に巧なり當時の歌集中、その歌の入らざるなし、世もつて榮とす。

爲家の死後、その三子相共に軋轢して、各々一派の歌風を唱道す。爲氏は御子左、或は二條家と稱し爲教は毘沙門堂といひ、爲相は冷泉家と稱す。阿佛は女ながらも、力を冷泉家に盡し、大にこれを與せり。毘沙門堂流は、二條家の風體平易にして味無きを厭ひ、專ら俊成定家の風を旨とせしかば、ろの歌少しく見るべしと雖、要するに奇に偏して、一種の癖あるを免れず。この人の撰べる敕撰玉葉集を見よ、實に異樣の觀あるなり。されど二條家にては、言を定家、家隆に托して、毘沙門堂流にて用ゐる詞を、ある場合に限りて、用うべからざるの法を立てたり。毘沙門堂流は、早く其家たえたれど、この爭も、久しからずして消えたりと雖、二條家と冷泉家とは、これよりのちに至りても、終始相反目する、ことゝはなれり。

これよりさき、爲相まさに死にのぞみて、其領地細川の莊を、爲相に與へたり。當時爲相いまだ、幼かりしかバ、爲相の庶兄、爲氏、細川の莊をあづかりしに、其のち、横領して返さず、阿佛こ

こに於いて、ひとつには爲相を勵まし、冷泉家の倒れざるをはかり、又、ひとつには、奮然自から鎌倉に下り、將軍家に訴へて、領地を取戻さんと謀ふ。阿佛の鎌倉に下りし時の紀行を、十六夜日記といふ。文辭優雅にして、ことにそのうちの歌、誦するにたへたり。且つこの日記は、阿佛が二兒の爭を憂ひつゝ、煩悶紛思の際に東下せし紀行なれど、眼にふるゝの風光、耳にきくの聲色、みな、その多情多恨の涙となりて、篇中に現はれ、一讀おのづから感慨深からざるを得ず。故郷を立出づる前夕、

閨の中を見れど、昔の枕さへさながらかはらぬを見るにも、今更かなしくて傍に書つく、

止め置くふるき枕のちりをだに
わが立ちさらばたれかはらはん

また紀行中、美濃國關藤河といふ所にて、

わがこども君につかへん爲ならで
わたらましやは關のふじ川

心中の愁情、果して如何、また、不破の關屋にて、

その板庇は、今もかはらざりけりとて、

ひまおほき不破の關屋はこの程の
時雨も月もいかにもるらん

尾張國熱田の宮へ參りて、

いのるぞよ我おもふことなるみ潟
かたひくしほも神のまに／＼
鳴海潟和歌のうら風へだてずば
おなじこゝろに神もうくらん

雨かせも神のこゝろにまかすらん
我ゆくさきのさはりあらすな

誰か一誦して、同情の涙なからんやは。さて、この日記を讀むによき注解書は、

十六夜日記殘月抄三卷　高田與清著

こそ、いと簡便のものなれ。阿佛遂に訴に勝ちたりと雖、爲氏、爲相は相和せず。爲氏、二條家を爲相、冷泉家をおこす。阿佛其間にあつて、頗、冷泉家を扶け、これよりのち、冷泉家は、世々和歌所をつかさどることゝはなれり。阿佛の著に夜の鶴あり、歌道を論じたる書にして、古今の名書なり。冊數も一冊なれど、余輩の評論を要せずとも、歌道に志す者、一度これを繙かば、この女傑の卓識に驚くなるべし。

道の志をり歌合（十四）

久志本常幸寄贈

埋木のしたばくつれどいにしへの
はなのこゝろは忘れざりけり

濁にもしまぬはちすの身なりせば
しづむとも世を恨みざらまし

いともゆゝしくいさぎよききみさを、貴むべし。

住みすてしふるき籬のにはにしも
かゝるにほひの花をうゑける

亂れたるまがきのかやのした折に
やどの主人のこゝろをぞしる

ことわざに「たつ鷺も、跡の泥をにごすな、」といふ。うき身のはては、いかになるとも、とかくに、後の名こそをしけれ。白石先生の折たく

栞に「人は、つねに死しなん後のみぐるしからぬやうを心にかくべきなり。と、父のいましめのたまひたりき。扇などをも、人おほき中にとりおとしわすれもすることあり、これらの物にても、その主の心はおしはからるゝものなりと、仰られて、繪もしかるべき人のゑがきしにあらねば、用ゐたまはざりし。」とあり。むかし人は、かくなん厚かりける。

紅葉のえだにかゝれるみのむしは
　時雨ふるともぬれじとや思ふ

果なしや筒井のかはづわればかり
　はかをもしらぬ淺きこゝろは

かゝる小人の世におほかるぞ、うたてかりける。

うゑおきてこゝろづからに秋風を
　聞くこそわぶれ庭のおぎはら

散までに山の木の葉をそめすてゝ
　おのれや霜のおきどころなき

みづからなせるわざはひぞ、おもひしるべきいましめなるべし。

松が枝はみどりすくなく埋もれて
　むらさきかゝる池のふぢなみ

降ると見ば積らぬ先にはらへたゞ
　かぜあるまつに雪をればなし

借家におもやとらるゝ、」といへるたとへのごとし、妻のいきほひ家にはびこりて、夫はあれどもなきがごとく、執事の權威はほしいまゝにして、君はおそるゝにたらざるやうになりもてゆく、

此たぐひ、これをその初に制せずして、なほざりにうちすぐせバ、つひには、いかにともすべからざるにいたる、世におほきためしぞかし。覆車の轍をかゞみるべきことになんありける。

庭の面は月もらぬまでなりにけり
　こずゑに夏のかげしげりつゝ

紅葉をなにをしみけん木の間より
　もりくるつきは今宵こそ見れ

夏の庭のしげりあへるは、よろしけれど、月影のさまたげらるはうらむべし。もみぢ葉のちりうせぬるはをしけれど、木のまの月のもり來るはうれし、うれバうしなふ世のならはし、人間萬事塞翁が馬のことはりなるべし。

秋まではふじのたかねに見し雪を
　わけてぞこゆるあしがらの關

淡路島はるかに見つるうきくもゝ
　すまの關屋にしぐれきにけり

けふは他のうへ、あすは身の上」といふことわり、なほざりによその事に見すぐしなぞ、うろたへてとりみだすことぞおほからめ。

うきてゆく雲まのそらの夕日かげ
　晴ぬと見れどまたしぐるなり

風はやみふるかと見れバあま雲の
　よそになりゆく夕だちのそら

いとふべき事は、のがれがたく、ねがふのぞみはたがひゆくこそ、うき世の中のさまなれ。

たのしみに歎きは影とそふものを
　世よわふはどはしる人やなき

何をうれへなにを嬉しと思ひ寢の
　夢ばかりなるかりの世なるに

福は禍の伏す所にして、賀客堂にあれば、弔客門にありとかや。否泰消長は、天地の常理なり、いはんや、人においてをや。

とにかくに心にものゝかゝはぬも
　有はつまじき世にぞなぐさむ

心からこゝろにものをおもはれて
　みをくるしむる我身なりけり

おのが分に安んぜざるひが心より、さま〴〵のうきふしに、みづから己を苦むるは　はかなき惑にこそ。

いかにまた待せ〳〵てさくらむな
　咲くほどもなく散んとすらむ

一聲にいかゞうらみんほとゝぎす
　そこだにきかで待しこゝろに

心におもひたりのなきものは、はしたなくつきあがりしていとうるさし。

眺むとて花にもいたくなれぬれど
　ちるわかれこそ悲しかりけれ

更くるまで眺むればこそ悲しけれ
　おもひもいれじあきの夜の月

おほよそ、世の中の事は、何によらず、よきほどにもてなして、いたくなづまざるぞよき。あながちに、事をこのむ人は、悔をまねくことおほし。

果なくもわが世のふけを知ずして
　いざよふ月をまちわたるかな

月のいるやまに心をおくりいれて
　やみなる跡の身をいかにせん

いたう物に着しぬれば、心もそらになりもてゆきて、おのが身をもわするゝにいたるぞかし。いましめつゝしむべきことぞになん。

いづ方に花さきぬらんと思ふより
　四方の山べにちるこゝろかな

今よりはこゝろゆるさじ月かげの
　ゆくへもしらず人さそひけり

これも、物をもてあそびて、志をうしなへるいましめなるべし。絲竹のしらべ、碁、すごろくのたはれ、茶の湯のあそびなども、さふらひのいとまには、風流のたのしび、淺々とこのむはよし、すきすぐしてまどひおぼれなんことを用心すべし。いたずらに、身の本業をおこたりて、ひたすら遊興にふけり、あるは、漁獵にのみすさびなんは、沙汰のかぎりあるべし。

われも思ふ　浦ふく
人もわするな　風の
ありそ海の　やむ時もなく
（後撰集）

忠孝二筋道

渡部乙羽

其七

平生日頃睦しき中の親子さへ、別れて久しき年を經りては、相懐ふの情は深かるべし。これはまた振斷り難き恩愛の絆を絶ちて、母は天涯萬里の旅の空に、片雲に入る半輪の月の暗き夜、友を呼ぶ雁の聲を聞きて、涙に荒布の袖を濡せば、子は故郷に衣擣つ砧を聞きて、そゞろに秋の深きを知り、木枯の音を耳にしては、流されし人の衣の薄きを思ひ遣りつゝ、月夕花晨、忘るゝ隙ぞ無かりき。

なべての親の心ならば、這へば立て、立てば歩めと子を思はぬはなく、春風天に昇ると書ける紙鳶を飛むして、竹外に餘念無く遊ぶを見ては、去年の衣を肩上げ下して、寸の伸びたるを喜ぶべし。況てや八丈嶋に在る岩橋靜江は、人並優れて慈悲深き質なれば、子を思ふの情の一入にて、その身が朝夕仕へ奉る若君の成長を見るにつけても、我が子の行末を思ひ煩ひて、夢は萬里の波濤を渡り、權之亟が身邊を蝶の如くめぐるもの、幾回なるを知らず。

權之亟も幼少折は、御臺所に養はれて、荒き風だに中らざりしが、母を慕ふ心の切なるにつけ、空しく過ぐる月日の早きを怨み、假りに出家得道して御暇を願ひ、諸國を行脚して八丈嶋への便船を索むれども、絶えて聞くこともあらざれば、詮なく流れ行く光陰を送りつゝ、一年二年を送りぬ。

曩には血氣の逸るに任せて、闇夜に船を行らん事を思ひ、あるひは國禁を犯して、彼嶋に渡らむ事を圖りしかど、思ふが儘にならざれば、今は住吉の浦近き廢寺に足を容れて、暫らく時機の到るを待てり。

浦傳へは汐乾きて、濱は砂を晒し、海風長へに吹きて、笘波る鳥影も淋しげなり。山里の哀れは木枯に知るれど、朝な夕なに潮聲を聞く處にては、さゝんざの松の嵐に、遠時雨の音添へて、物淋しさは冬近き頃の何となく、氣の結ぼるゝ事よと、權之亟法師は竹椽に經机を置きて、夢ともなく、現ともなく、沖の方を恍惚として眺め居けるが、漫々たる青海原を矢の如く行く一艘の船あり。われ〱早きことよと眺むる中に、法師は何時しか其船に乘移りぬ。滿帆風を孕みたれど、見る間に形を見失ひぬ。この順風に如何なる港に着くやらんと、尙はよく彼方を打見やれど、只ある





小島に着きたり。無人の地とも思はるゝまで淋しくて、松風のみ荒ましゝ。法師は船より出でゝ、砂白き汀に下り立てど、船は法師のみを殘して、沖の方へ漕ぎ去りぬ。顧みてうち驚き、その船かへせと呼べど叫べど、答ふるものは岸打つ波の岩に碎くる度毎に寄るは鵆の群なりけり。法師は獨り殘されて、唯茫然として立ちたりしが、この時夕陽落ちんとして、光芒長く波を射るに氣がつき、斯くして此處に在らんには、日暮れ路黑くして、宿るべき岩蔭も見えずならむ、今の間に探り索めて、今宵はこの嶋に一夜を明さんものと、左右に眼を配りつゝ、二三町も歩みしと思ふ頃、髮を蔓草もて束ねたる一人の婦女の來りぬ。相好は凜として氣高けれど、生來の玉顏を、日に曝し、風に吹かれて、色厭くまで黑し。膝も漸う隱れぬべき布子に、白き襯衣を纏ひ、昆布もて組める如き帶して、肩には鹽汲み桶を擔へり。法師この女を見るや、走り近づきて、此處は何處ぞと問へど、女も此島に見馴れぬ法師と詞をかけぬ。我はこの島を遠く隔りたる日本攝州の僧なり、御身は如何なる人なるぞ、包まず語り給へと云へば、女は眉うち顰めて。御僧は攝州にてましますか、妾の住むこの島は八丈と申す處なり。此處には浮田中納言殿流され給ひて、今

尚は御息才にてましませり、御僧は難波にて其名を聞き給はずや、豊臣秀吉公か御覺え目出度かりし御方なりと語れバ、法師はいと驚きつゝ。然らバ御身は秀家公の若君を守護し給ふ、岩橋靜江樣にてはお在さずや、我は幼少の折御身に棄られ申せし權之丞なり、今生の中一度御目にかゝりたく思ひ居りたる願ひの、圖らずも屆きて、嬉しく存じまする、母上よも御忘れはなさるまじ、我は御臺所の御手よ成人りたる權坊なり、優しき御詞をかけ賜はれと、砂にうち俯し、聲を立てゝぞ泣いたりける。

鹽汲む女は肩にしたる桶を松蔭に捨て置き、法師の手を握りて、その顔をつくづく打眺むる體なりしが、思ひあたる事やありけむ、俄におうおうと微笑みて。其方は難波に殘し來りたる權坊か、妾は母の靜江ぢや、よく虫氣も無う、大人しうなつて呉れた、それに何より問ひたきは、御臺樣には如何遊バせしぞ、語れ聞かんと、嬉しさに涙も出でず詰め寄る折しも、何時の間にか忍び寄りけむ、捕手の人數六つ七つ、漁夫を交へて十人餘、手に手に獲物を打振りて、國法犯せし大罪人、其處一寸も動くなと、寄るよと見えしが、中にも身輕な捕手の一人、飛鳥の如く飛びかゝつ

て、法師を發矢と殴つかと思へバ、夕暮の風樹を騒がして、目を覺せし庭前の芭蕉は寸斷〱に破れたりける。

花菖蒲

千稻子

其八

僅に光を送りたる缺月の影も西山を攀じて落ち行きぬ。忽ち天の一隅より馳せ來りたる冥闇は勢烈しく凡てを兩掌の中に包めり。只星の光のみ落花の紛々たるが如く、此冥闇を透して薄青く瞬く。

あらゆる天地は死し、萬物は悉く眠睡す。夜は全く空寞沈寥の内に隱る。此冥闇は愈々冥闇を生み來り、空寂は益々空寂を高め來る。世界は森々として音なし。

俄然、此空寂を破りて家の内に椽板を蹈むが如き音響く。此音のある所に、一層墨りたる冥闇を染めて、漆よりも黑き一團の影立ちたり。

朦々として、或は消滅し或は動き、舞ふか如く又浮ふが如く見ゆ。
此怪しき物は怪しき音を伴うて漸々奥の方へ進み入り、一つの襖の前に立ちぬ。
暫くして少しの響をも來さずして襖は二つに開く、開くと共に冥闇を破りて彼方の襖を漏るゝ一道の火の影は、怪しき物を掠めて細く長く滑る。
怪しき物は何ぞ。黒き髮は肩先を覆ひて二つに割れ、脊と胸とに紛々として亂れ落ち、蒼白き顔は益々蒼味を深め、珠玉の如き兩の眼も血を走らしていとゞ凄し。菖蒲は再び虎穴に入りて虎子を得んと思ひたち、彼れの動かざる精神は彼れの疲勞の肌體を驅りて遂に此處に來りぬ。
如何にしたけん、立ちたるまゝ少しも動かず、開きたる襖に片手を掛けて暫くの間岩の如くに鎮まれり。
やがて其髮を片手に掻き上げて新月の眉を昂けつ、屢々四邊を凝視し、頭を傾けて室中の動靜を窺ふ。されど邊りに人の氣配あるべくも見えず、鼾の聲の何處よりも音信れ來らず、只吾が呼吸する音の耳を打つのみ。
かくて震慄する足を固めて漸々彼方の襖に近寄り行き、身を密接して息を兩掌に殺

し、耳を欹てゝ窺へも、我が胸は自ら躍りて襖爲に動く。
此天日を與に共に戴かざる仇敵は此襖の中にありや、無念の血涙を振り注ぎし我が怨敵は此襖の彼方に横はり居るや、憤怨の睥睨を與へし我が敵は覺めずしてありや、此一時、我が首を彼れの手に刻まるゝか、彼れが鮮血滴る生首を我が手に握りて母上の靈に備へ、鬱積したる怨みを晴し得るが、是か非か、善か惡か、神佛の切なる我志を汲み取り給ひて此腕よ宿り給ひ、年來の怨みを晴し給はれや。
心中に兩掌を合せて伏拜み、身を縮めて片膝をたて、やがて諸手を襖にかけて開けんとす。
滿腔の熱血は顏上に向つて群り登り、肌體は壓せらるゝが如くに覺えて咽元を通ふ息の根もいと苦しく、細く白き腕に滿身の念力は籠り集まりて鳴らんと欲す。
此襖開く事一寸にして我が安危の決する時は一寸を早めぬ。かくて一瞬時の進むに從ひ漸々襖開く事廣く、我が一身の安危は漸々定まる時を早む。
少しく開きて暫し休め、少しく休みて又少しく開く、遂に襖は二つに開きぬ。菖蒲の身は全く明に燈火を浴びて、震ふ事烈しく見らる。

やがて疊につけし兩手を柱となし、縮めたる體を伸して部屋の中を殘りなく見廻し、又跡を振返りたる眼ざしは異しき光を含みつ星の如くに輝く。

青山綱運は我子を御殿に殘し置きて、獨り蒼皇しく歸り來り、何の爲にか俄に妻子を促して、少し計りの調度と共に何處へか送り遣り、下郎を叱して彼此と立噪ぎたる後、獨り枕頭を撫して心地能氣に眠りに就きぬ。今や如何なる夢路を辿り居るらん、身動かしもせずして恰も死したるが如くに靜まり。

菖蒲は自ら我腕の肉を摘むで高波うつ胸を抑え、膝に疊を刻みて身を縮めたるまゝ、遂に室の中に滑り入りぬ。

閴として音なき事暫く、忽ちにして此闇を壓したる唯一ッの燈火は打消さる。今は家の内も悉く冥暗のみ蔓り、再び四邊は寥々の底に沈みぬ。

突如として悲鳴の一聲は此室の内に破れて死したる天地を呼び起し、恰も錦綾を裂きたるが如く邊りに響き渡りて沈みたる家の内を震はしむ。これと共に颯たる音をなして俄に水滴の飛逸したるが如く、點々として疊に落つる音聞ゆ。

暫くして摚と倒るゝ物音、永き震動を殘して鳴り轟く。

かゝる時、彼方より囂々たる人聲聞え、撻々と椽板を蹈む足音噪がしく、此方へ向つて馳せ來るが如し。

此刹那に、室の中より暗も突いて走り出る者あり。今や第二の室を拔けんとする時に、彼方より馳せ來りたる侍にはたと行き當り、あなやと思ふ内侍の聲として、已れ曲者逃すまじきぞと呼ぶ、此叫ぶ聲未だ終らぬ間に、キャッといふ最期の悲泣と變りて襖に當りつゝバッタリと倒れたるが如く思はる。

それと云ふや否や、許多の侍共は此方角に向つて走り來り、冥の内に我が全士とは知らずして相握み相搦し、力足を蹈み鳴らして腕を叩き、此家を上下に轉倒せしめ天井に眠る鼠さへも何事かと慌て驚きて奔走す。

此隙に曲者は早くも拔け出で、ヒラリと椽を飛びおり行く、其朦なる影を一人の侍は目早く認め、忽ち聲を荒らげて、敵は彼方に候ぞ、庭に候ぞ、庭ぞ、庭ぞ、庭、庭と續けさまに云ふや、皆ぬかつたりと舌皷打鳴らしつゝ足を轉じてヒラリ〳〵と飛び出で、鈍眼を光らして暗き木立の蔭を搜しに搜す。

かゝる折しも、彼方なる泉水にざんぶと云ふ音のするよと思へた、水二つに割れて

浮萍慌しく開き、細珠雨の如くに飛びて飛沫は夥しく四邊に立登る。者共はアッと驚き、云ひ合さねど悉く其淵に走り寄り、怪しき文を齒きて緩やかに波を織る水面を打護り、拳を握りたる儘暫しは云ふ所を知らず。わはれ笑止、闇の内に呆然たる顔、二ツ、三ツ、四ツ、五ツ、六ツぞ晒されける。

文林

竹風

近衛　忠熈

今年おひの竹のみどりの涼しさに
風さへつゆをちらしてぞふく

毛利　元徳

ふる雨の音かときけバしげりあふ
窓のたかむらかせそよぐなり

東久世通禧

露にさへたわみやすきを今年生の
竹のわか葉にかせわたるなり

佐々木高行

朝風にたけふさやぎてやまかげの
軒たすゞしくつゆぞこぼるゝ

鍋島　直大

しげりあふ庭の竹むらふくかせの

音もすゞしきなつはきにけり
　　　　前田　利嗣

ふく風にそよとてたへて打なびく
　竹のすがたのおもしろきかな
　　　　長岡　護美

若竹の葉わけのかせのすゞしさに
　よのうきふしもなつ山のいは
　　　　高崎　正風

今宵また竹のよかせやたちぬらん
　みねかくれする里のともし火
　　　　前田　利鬯

いづくにか雨はふりけん打さやぐ
　軒端のたけのかせぞすゞしき
　　　　諏訪　忠元

橋邊螢

梓ゆみやたてのはしのをちこちを
　かせにみだれてほたるとぶ也
　　　　黒川　眞頼

竹風

そよ／＼と我にかたらふ心地して
　軒端のたけにかせわたるなり
　　　　宮地　嚴夫

わか竹にすゞしき風のかよひきて
　夏としもなきまどのうちかな
　　　　坂　正臣

夕月の葉ごしにみえしくれたけに
　ふけて聞ゆるかせのおとかな
　　　　植松　有經

そよ／＼と竹のよ風のおとづれて
　寢覺すゞしきねやのうちかな

小出　粲

世の中をへだつる竹のはやしにも
　うきはのがれぬ風のおとかな

谷　勤

たえずふく竹のよ風は手まくらに
　なれて耳にもさはらざりけり

内藤　存守

むれてゐる林の小とりさわがして
　竹の葉わけにかぜわたるなり

大口　鯛二

はりうゑしひとむら竹に吹く風の
　おとづれ絶えずなれるやど哉

五月雨　林　甕臣

天の底も朽てぬけもやしたりけん
　こぼすがごとしさみだれの空

新竹　三浦　千春

柴の庵のめぐりの竹のいけがきに
　たちのびたるはことし生なり

對橘陳思　石丸　忠胤

世中にありしむかしをわすれぬは
　花たちはなとわれとなりけり

山家納涼　西川須賀雄

山里はなつなきにはのなつくさに
　まだ秋ならぬあきかぜぞふく

納涼　糸山　貞幹

角田川なみはかせをやわらふらん
　ぬれて吹きくる音のすゞしさ

加賀千代　佐々　豊水

淵の松くもゐのかりのこゑよりも
高きみさをゝあふがざらめや

窓前螢　草野　隆道

池水にかげはうつりてすゞしくも
わがまど近くとぶはたるかな

女鑑といへる文を見て　篠原　政禎

なつかしき色こそみゆれをみなへし
くもらぬ御世の清きかゞみに

竹風　鍋島　榮子

わか竹の葉すゑの露をふきみだす
風こゝちよきあさぼらけかな

蜂須賀隨子

文机のちりもをりをりはらふなり
まなびの窓のたけのしたかぜ

前田　朗子

そよと吹く風にもけさはなびく也
まき葉ひらけし窓のなかたけ

柳原　愛子

わか竹のはわけの風のすゞしさに
なれしあふぎも置きわすれ鳧

小池　道子

呉竹のはすゑのつゆのちるみれは
音せぬかぜもすゞしかりけり

北島以登子

まきはさへいまだ開けぬ今年生の
竹にはかぜもさはらざりけり

松平　健子

立のびし竹のまき葉のつゆちりて

すゞしく通ふまどのゆふかぜ　諏訪晴子

庭螢

夏の夜はすゞしさまさる庭の面の
草葉のうへにほたるとぶなり　田邊わけ子

心

かたちだにわれは忘らねど佛とも
鬼ともなるはこゝろなりけり　安東菊子

首夏風

花の枝にいとひし風もおのづから
またるゝなつとなりにける哉　尾崎すう子

雨後夏月

あらかりし夕のあめやくだきけん
晴れてのぼるかたはれのつき　師岡須賀子

深夜鵜川

川上のうかひのかゞりかすかにて
棹のねたかし夜やふけぬらん　堀上壽子

盲人の文字書くを見てよめる

筆とりて文字かく見れば世に疎き
見ぬめの浦の海士としもなし　河野文子

螢

雨雲のうきたつ夜半もゑわかず
ほたるばかりはくもらさり鳧

ふの字七ついれてよめる今様　諏訪晴子

隅田川原にふねとめて
道の芝生をふみつゝも
其名もたかき龜井戸の
神の宮ゐにまうづれて

池のふち波ふくかせに　なびく姿もをかしきに
神樂のふゑの音に連て　いざ歸らんとゆく道に
今をさかりと咲にほふ　色香もふかきふかみ草
花を手折りて我いへに　かへる心のたのしさよ

梅雨

横井知萬多

天には、いかばかりの雨をか、貯ふらむ。梅雨ふりはじめてより、かぞふれば、を指もそこなはれつべし。あはれ、この夜ころ、松明ふりかざし、同胞打つれ、敵の陣近くよりて、倶に天を戴かずといふ、親の仇討とりしも、こよひのうちなりなど、わが身のやうに、勇みよろこべる、歷史家もあらむ。ふる雨も、いッかないとはぬ、女の念力、杖を力になど、うめきつゞけて、川が留りぬとはなど、まめり聲する、戯曲家もあらむ。いづれかやめとなど、うたひ出づる、歌人もあらむ。琴の糸のゆるびがちなるを、かこつ少女もあらむ。さはいへ、このうれしき、くるしき、とり〴〵なる中に、苦しきものも、みなくるしともいはゞいへ、なほ樂しひ多かりぬべし、さらでも、樂をもとむる種子なるべし、苦しなどいふべき事かは。世にはし店などいひて、道のべに、形ばかりのものならべて、夜な〳〵、更たくるまで、うりあきなひても、漸う親子が、くふべきものゝしろにもたらはぬがおほきを、かく打つゞきては、うるべきものは、うりつくして、今は日々になくてはならぬ衣服調度なども、みなうりつくしてもたらはぬを、いかになげきくやみてあるならむ、いかにやつれ

てあるならむ、骨たち、肉おちてなど、おもひつづくれバ、心は、いつのまにかとぢくもりて、膝は五月雨にぬれたる心地す。折しも、なきいでし杜鵑、うれしくてうたふか、かなしくて叫ぶか、さけぶとならバ、何事もしらで、たのしく遊ひたはぶるゝ、人たちのあたりにきて、あはれなる貧しき人たちの、さまもつげよと、いはまほしくて。

夏のたのしみ

師岡須賀子

をしみつゝ、ぬぎかふる袖のかろけなる、庭にもあれ、山にもあれ、打見るかぎり、木末の青葉しげる白たへの卯花、紅の薔薇ゆかりの色ふかき

かきつばた、など見る、いと樂し。まして、香橘のかをる夜は、待一聲に心をつくし、槇の戸たゝく、水鷄に、まどろまむことををしみ、遣水の螢、梅雨の晴るゝゆふべ、いと樂しくうれしき物なり。はた、露も、きりも、へだてぬ月影に、はし居して、明けなむ空を、わすれしくものなしとては、常夏のつゆに、心おかれ、ゆかしさをおどろが中の姫百合に知り、覺束なげなる夕かほの花に、紫のおもとの心しらひを思ひ出るなど、皆、このころの、暑忘らるゝ業ならぬはなく、いと〳〵、樂しきものなりけり。扇の風、氷水、氷菓子とかいふもの、蓮バの露、夕立わとなど數へあげんも言の葉つくすまじうなん。さるは、學校の休とて、近きは、多摩川の鮎漁、遠くは、長柄川の鵜飼見

になど、いでたち、あるは、此處の海水浴、かしこの温泉に、行く人は、いかばかり、樂しく、嬉しき事ならまし。さはいへ、筆にも、詞にも及ばず、樂しく、うれしきは、この、學校のやすみに、故郷にかへる人、かはらぬ山水のけしきを見て、老せぬ父母の、みかげを拜む人。

船をうかべて螢がりする記

竹園女史

くれがたき夏の日も、やゝ、西山に、かたぶくころ、いざや、夕風のすゞしき川邊に、ほたるがりせむとて、思ふどち、ひとりふたり、舟にのりて、こぎ出るまゝに、はや、夜にいりぬ。堤のかたを見れど、わらべの、むれゐて、飛かふ螢をおひ行さまも、いとをかし。あなたこなたと、こぎめぐるほどに、取得しほたるの、おほかりければ、

夏衣うすきたもとにうれしさを
　つゝみあまる迄螢なりけり

夜もいたくふけぬるを、いざとて、船はかへしぬ。

おのがみの　おもはゞ
おのがこゝろに　ものは
かなはぬを　おもひたりなん

（詞花集）

雜報

●去月二十日は、いとも、恐しき地震にて、府下の人を害ひ、家を壞すこと、最、多く、近きころ稀なることにて、誠に哀れに、慘きさまなりし。されど いとも畏き我か 大君の大宮を始め奉り、赤阪の宮にも、恙あらせ給はざりしこそ、吾人臣民の、喜び賀ぎ奉るべき事にこそ。

●皇后宮 には、この一日、御避暑の爲、神奈川縣三浦郡葉山村なる、御用邸へ御啓あらせ給ふ、この日、高倉典侍御陪乘にて、香川太夫を始め數人供奉し奉り、宮には御氣色、殊に、うるはしく、御發あらせ給ふ。御滯在は、凡、四週間程なりと承りぬ。

●外事 は、婦女子の治むる所ならずといへど、國の大事、家の大事に至りては、必、心を用ゐざれバ、其の本分は立ち難きなり。今は、朝鮮の騷亂にて、我が國は、兵を出すの備、支那に對するの事など、實に容易ならざる事件の起りたるなれど、婦女子とても、安坐して娛むべきことにはあらず、もし、事の變じたらんには、戰の起らんは當然なれど、此の際に方りては、其の夫などをして、內に顧みて躊躇はしむるが如きことなからんことゝ、華奢の風と、無益の費を省きて、國用の備をも給さんことを計こそ、實に、その本分を知るともいふべきになん。

●露國貴婦人　の虚無黨に加盟するもの多しとは、聞くも、忌まはしきことなれども、此頃、新聞の傳ふる所に據れば、去五月廿九日、同國のマリコップ子爵夫人の私邸内に、怪しき節のあるを以て、警吏は之を圍みて、不意に家宅を搜索したりしに、果して、虚無黨の主義なる貴女の連判狀をも發見したり。此の時、一人の女生徒は、睡眠中に、捕らはれたりしが、途中にて、繩を脱きて、ネバ河に身を投げたりと。これが爲、宮城の守監は、宮中にて、毒殺などの事變あらんことを恐れて、悉く、宮女を解雇したりとぞ。此の一事にても、彼の國の風俗國柄の、最、醜しく猥りなることは知らるべし。我が大御國に、生出たるものは、聞くも、身の寒きを覺ゆる計なり。諸嬢、彼と我とを考へて、其の身の務をな懈り給ひそ。

●松尾たせ子　の事は、本誌第三十一號の史談に、委しく掲げたる如く、世に得難き夫人なりしが、惜ひ哉、去月十日八十四歳の高齢を以て終りぬ。あゝ、たせ子の勤王の志厚きは、女丈夫といふべく、婦道の正しかりしは、賢婦人とぞ仰ぐべきなり。今此の人を失なふは、實に、惜むべきことにこそ。

●青山博士の夫人　博士の北里博士と共に、官の命を受けて、黑死病の原因取調の爲に、香港に赴き、遂に其の病因を見出したるは、此上なきことなるに、不幸にも、同病に感じて、頗ぶる、危篤なりとの報知ありしに、博士の友人は、早く、之を妻君に報せんとしたれど、皆々躊躇ひて、遂に、

親友の森博士(林太郎君)より、其の仔細を告げたりしに、夫人は、さしたる惑ける氣色もなく、其の事は出立の時、呉々も申置きし事もありて、元より覺悟の事なれば、餘儀もなきことながら、取調の事は、畢られしや如何にとの間に、森博士は取調は成れる旨を告げたり。夫人は、さらば、何よりの事なり、青山一人の身命は、如何、なりとも致し方なしと、語れりと、其の雄々しさに、森博士も只管感じて歸りしとぞ、夫人の志操こそ、實に、感ずるに餘ありといふべきなれ。

●褒賞　長野、及島根縣にて、先月十九日金圓を賜はりしは、左の如し。

信濃國上伊那郡高遠町　本多利宗妻　ふし

平素克く其姑に事ふ殊に明治十六年姑の不隨病に罹るや爾來十餘年日夜力を看護に盡し孝養至らざるなく傍ら夫を扶けて能く家計を維持す其忠行洵に奇特とす仍て其賞として金一圓下賜す

石見國邑智郡君谷村上田圓太郎母　渡邊　ゆき

資性溫厚姑に孝順夫に貞節殊に夫の病に罹るや看護懇篤到らざるなく其遂に死亡するや姑既よ老衰三兒尚ほ幼弱一家貧困に陥るも毫も屈撓せず躬自ら耒耜を執りて農事に服し具に艱苦を嘗め孜々生計を營み宿債を償却す姑尋で病に臥し自由を失ふに及びて藥餌療養意を竭し承歡倍々努め又克く三兒を撫育し就中先婦の兒を慈愛する所生に超ゆ其志操を渝ぜざる茲に十有餘年一日の如し洵よ奇特とす仍て其賞として金六圓下賜す

●年廼舍の六月例會の歌にて、婦人の分は、左の如し。

六月兼題

月前水鷄

たちいでゝみれど柳のこがくれて　月さすかどにたゝくひなかな　南部明子

ひさかたの月影きよみねやのとを　わけよとたゝくひなゝる覧　南部喜久子

よひねする人多けれどみじかよに　増山三雪子

月みるともはくひなゝりけり

ふけゆけバ小川のなかれ音すみて　溝口久爾子
涼しきつきにくひなゝくなり

月みつゝねもせでゐかすわが門を　大岡　操子
くひなはよたゝなどたゝく覧

水清きかどのせゝらきおとふけて　増山喜三子
涼しきつきにくひなゝくなり

月みんとまきの板戸もさゝぬよを　大田原千秋子
しらでくひなのなにたゝく覧

里のこがにごしゝみづにすむ月の　南部　麻子
影をすゝしとくひなゝくらん

さみだれもこよひはゝれて池の面の　南部　銈子
涼しきつきにくひなゝくなり

はかりきと又も水鶏やおもふらむ　土屋　峰子
月にわけたるまきのいたとを

よもすがら涼しき月にうかれけん　土屋多々子
ところさだめずくひなゝく也

まきのとをさゝで眺むる月のよに　大河内一子
いづこをたゝくゝひなゝる覧

月さえてしばの板戸をほと〳〵と　酒井　鉄子
叩くはよはのくひなゝりけり

かきのとのをかはの水鶏鳴初めて　酒井　辰子
月おもしろきよもきふのやど

まこもぐさかりはらひたる池水に　鶴　久子
月もうつりてくひなゝくなり

おほかたは涼しき月にとざゝぬを　荻野美佐子
いつこをたゝくゝひなゝる覧

みるほどもなき夏のよの月かげに　渡邊須磨子
なにわけよとてくひなゝく覧

月影のすめるをがはのみづきよみ　河合喜佐子
こゝをせにしてくひなゝく也

月みよとうれしく叩くゝひなをバ　深見　愛子

はかられけりと何おもひけむ

叩けどもはからるべしやなく水鷄　水原未瑳子
月にとひこむともゝなきみは

月みつゝねられぬよはの槇のとを　小坂多餘子
なにとてたゝくくひなゝる覽

まちいでしつきもふけゆく短夜を　田村毎子
おしとやたゝくくひなゝる覽

窓のとをさゝでみわたす月のよに　尾臺靜子
なにをくひなのよたゝなく覽

すゞみすとさらて風まつ月のよに　後藤可禰子
まきのとちかくくひななく也

おばしまにすゞみてそれも月影の　勝田筆子
はやふけそめてくひなゝく也

このまもる月も涼しくすめるよに　飯田以禰子
叩くゝひなのおとろかすらん

夕月のかげふみゆけばやまもとの　國分美佐子
いさゝをがはにくひなゝく也

月影はまだよひながらあまのとを　益子伊都子
わけよとたゝくゝひなゝる覽

とふ人もたえにしよはに槇のとを　藤井靜子
月にたゝくはくひなゝりけり

月よにも人はとひこぬまきのとを　南摩牧子
たえずたゝくはくひなゝり鳧

夏のよのさやけき月にくさのとを　宮田道子
水鷄のほかはとふひともなし

よもすがら月みてさゝぬ柴のとを　宮木滿勢子
なにゝわけよとくひなゝく覽

夏のよは月みるまだになきものを　佐方多滿子
わけよとたゝくゝひなゝく也

叩くぞと柴のとはそをあけぬれば　飯島德子
月みよとてかくひなゝくなり

月みつゝかたらんともを松のとに　諏訪晴子

たゝくゝひなのこゑきこゆ也

さとのこもいまはかへりて月影の　會主　忠元
すめるをかはにくひななく也

●婦人慈善會　の美擧といふべきは、徳島の三好郡山城村の婦人九十余名より、三名村の窮民を救はんとて、義捐金を募りて、其の慘狀を嗟き哀むの意を述たる書を附け添へて、同地の新聞社に贈りしこと是なり。吾人は、嚮に、彼の慘狀を本誌に物したりしに、今は、この美擧を聞くを得たり。願くば、尚も、斯る義擧の盛にして、早く、彼の窮難を救ひ援け其の厄を免れしむるに至らんことを。

兼題

七月廿日
- 歌……小督局
- 文……扇の說

八月五日
- 歌……野露
- 文……琴を聞く

教の庭

七月五日兼題　夕顔

（天地人の外は原稿到着順なり）

天　長野縣長野町　柳　志げ子

さしのぼる月をまつまのゆふ風に
ゆらぐもすゞし軒のゆふかほ

地　埼玉縣浦和町　大橋　てい子

賤がやの竹のまがきのうきふしを
よそげに咲けるゆふがほの花

人　熊本市寺原町　仁保　基子

へだてなくみえにけるかな中垣に
咲きあまりたるゆふがほの花

片岡　光子

上露にひかりそひたるゆふがほは
月かあらぬか見るもまばゆき

平野　君子

たそがれの風になびきて賤が家の
まがきにあまるゆふがほの花

青木　春子

破れやの軒をもれくるつきかげを
へだてゝ志ろし夕がほのはな

永井　さい子

おく露のひかりもそひて夕がほの
花のいろこそすゞしかりけれ

國武　すま子

中垣のへだてはあれどゆふがほの
はなはとなりにさきかゝり鬼

内田　慶子

ゆかしくも賤がふせやの袖がきに
ほの〳〵見ゆる花のゆふがほ

佐々有鄰子

立よれた露もひとつにほふかな
志づが垣根のゆふがほのはな

徳永萬壽子

われはてし賤が伏家に咲きながら
よそめゆかしきゆふがほの花

澤田　春子

咲きつれど人もとひこぬながが垣に
みるめゆかしきゆふがほの花

宵ながらわくる空かとおもひしは　千々波橋子
しづが垣根のゆふがほのはな

むくらはふ賤が垣根はくれそめて　久保田律子
よそめすゞしく咲ける夕がほ

暮れそめて白露おけるまがきには　花山やすね
さくゆふがほの花のすゞしさ

山里のしづがのきばぞゆふがほの　花山みさを
はなさきしより人にとはるゝ

暮れそめてすゞしさそふる白露の　河野　文子
やどりゆかしき花のゆふがほ

よそめにもゆかしかりけり柚垣に　稲田　兼子
涼しくさけるゆふがほのはな

おくつゆに月のかげさす夕がほは　野尻　鶴子
葉がくれよりもなつかしき哉

繕はぬしづがかき根もたそがれに　羽田三緒子
よそめゆかしき夕がほのはな

賤が家のあれし垣根もゆふがほの　諏訪　晴子
はなのさかりは人ぞとひくる

たそがれにひとり涼しく咲き初て　平塚千代子
垣根ゆかしきはなのゆふがほ

夕顔のかき根にきよく咲く見れば　宇多田揚子
しづがいほりもゆかしかりけり

あれはてし賤が垣根をおひかくし　竹内美枝子
よそめゆかしくゆふがほの花

ゆふぐれに咲くらむ莟かずしれて　吉田　芳子
まつま嬉しきゆふがほのはな

おきいでゝむかふかきねに夕顔の　横敷かた子
つぼみも見えて嬉しかりけり

風わたるたかむら越に見ゆるなり　吉田たけ子
しづがのきばのゆふがほの花

あはれたがながめなるらむ八重葎　伊藤　操
茂れるやどのゆふがほのはな

山のはに夕日はおちてしづの女が　坂口すゑ子
のきばにさける夕がほのはな

心なきしづがかきねにはへども　土山八重子
つゆにやつれぬ花のゆふがほ

夕立のなごりすゞしく見ゆるなり　坂口しん子
いり日に匂ふゆふがほのはな

世の塵にそまぬ色こそ見えにけれ　神谷かい子
志づがのきばのはなのゆふ顔

ゆあみしてすゞめる人の袖かとも　宇野さく子
眞白にみゆるのきのゆふがほ

暮れ初て賤がかき根をわけ行けば　樋口かね子
あしもとてらすゆふがほの花

夕顔のはなやさくらし志づが家の　芳野春子
かき根もけふは色はえて見ゆ

葎はふ志づがかき根もゆふがほの　櫻木八重子
はなさきしより色ぞまされる

烏羽玉のくらき垣根のゆふがほは　草加さた子
たれ見よとてかゑみ初ぬらん

すみわたる月の光りをおくつゆに　大橋兼子
うつしてにほふ垣のゆふがほ

こぞさきし籬はいづこ立ちよりて　相賀金子
見るも涼しきゆふがほのはな

たそがれの風まつ頃はゆふがほの　藥師寺芳子
露よにほへるはなのすゞしさ

賤が家の軒にまつはるゆふがほは　内藤清子
よそめ涼しく咲きいでにけり

住捨てゝ荒のみまさるあばらやに　渡邊益子
はなさきかくす軒のゆふがほ

ませ垣に身をば任せておのづから　加納嘉子
涼しく咲けるゆふがほのはな

月影をまち出て咲けるゆふがほは　碓井武子
はなの光りやいかにそふらん

賤が家の軒のあたりにまつはりて　碓井信子
にほふもゆかしゆふがほの花

あてはてしかき根いとはで夕顔の　碓井和可子
ゑめるすがたのなつかしき哉

賤がやのかきも軒端もいろはえて　高橋政子
よそめゆかしきゆふがほの花

たそがれの露の光りのいろそひて　山田先子
ねこそいはれぬ花のゆふがほ

三日月のかゝる軒端にすゞしくも　川瀬茂子
ひかりゆかしきゆふがほの花

賤が家のをとなふ人もなきかどに　川瀬菊子
こゝろぼそげににほふ夕がほ

夕げたくけふりに垣はくもれども　井出　信子
　ひとり色ますゆふがほのはな

荒れはてし賤がかき根も此ごろは　溝口　佳子
　ゆふがほさきてなつかしき哉

假そめにゆひにし庭のしばがきに　西村　菊子
　さきかゝりたるゆふがほの花

山かげの賤がかき根もゆふがほの　神田　錦子
　はなさくころはなつかしき哉

月かげも光りをそへてしづがやの　神田　春子
　かきほに咲ける花のゆふがほ

をしみても日は山の端にいり初て　兒玉　玉子
　ほの〳〵見ゆる花のゆふがほ

かやりたくいぶせき賤が軒端にも　植木　鋼子
　ひとりすゝけぬゆふがほの花

袖ふれしその名も誰ぞとしら露の　岡部　豊子
　ちぎりはかなきゆふがほの花

蚊遣たく賤がいほりもいろそえて　小川　貞子
　よそめゆかしく咲ける夕がほ

夕顔のはなさくころはやれかきも　鹽井ふく子
　つゆのたのみのある心地する

とふ人もあらぬかきねの夕まぐれ　鹽井なか子
　何にほのめくはなのゆふがほ

雨はれし軒端のつまのつきかげに　大屋　丙子
　ひかりすゞしきゆふがほの花

荒れはてし垣はもよしや夕がほの　土生　清子
　はな咲きかゝり露のみてれば

蚊遣たく軒ばにちかく咲きながら　上野　兼子
　見るめすゞしき花のゆふがほ

賤が家の垣根すゞしくゆふがほは　高井　米子
　こゝろのまゝにはひ渡りけり

賤がたくかやりのけぶり立こめて　師岡千代子
　いよ〳〵白しゆふがほのはな

咲てこそ人にとはるれしづが家の　茂木　花子
　かき根つゞきのゆふがほの花

よそに見て過ぎぞかねつる賤が家の　杉本　芳子
　軒端にはふゆふがほのはな

此頃やさかりならむとゆふがほの　宮地　琴與
　はなおもしろく咲きにける哉

われはてし賤が伏屋のたけがきに　大橋きる子
人まちがほのはなのゆふがほ

蚊遣火のけぶりいぶせき軒端にも　小三　柳子
すゞしく見ゆるゆふがほの花

ひとならぬうき名やたゝん黄昏に　加島さゑ子
すがたをやつす垣のゆふがほ

荒垣もいとゞゆかしく見ゆるなり　明石いち子
はなのゆふ顔やどゝしつれバ

白露のひかりもそひてたそがれに　淺井　凾子
すゞしくにほふゆふがほの花

やぶれにし賤が垣根のゆふがほは　工藤りよ子
月のひかりにいろそへにけり

荒れはてし垣根によりて夕がほは　工藤わさ子
時をゑがほにひとり咲くなり

はしゐして月まつ程にさきにけり　篠原みの子
垣はすゞしきゆふがほのはな

其そこに白くといひしみやびをの　綿　くわの
むかしおぼえてさける花かな

七月五日兼題
避暑案内に答ふる文

天　長野縣長野町　吉田　芳子

まことやこがねをとかすと唐歌にも見ゑつる此頃の暑さに身もとけぬるばかりに思ひ侍るを今度塵の世をさけて戸隠の深山に設け給ひし別業は庭のたゝずまひやり水のけはひさては座敷のさまにいたるまで夏をもはらとまつらはせ給ひぬとてわざ〳〵避暑の案内言ひおこされたとへんかたなく忝じけなくなむ日頃の暑さに思ひわびたるをりなれた御言葉にまたがひ妹をも連て參るべければかしこまりなきつみは御許し給ひてよ萬はさふらひてのちと取りいそぎ御返しまでかくなんわなかしこ

地　千葉縣佐倉宮小路町　植木　鋼子

かねて避暑のためにとて某所へ御まつらひの御別莊こたびは海水を引いれて御浴場をさへ添られぬるよしにて御案内の狀給はりいといとうありがたくなん日頃いぶせき草の屋に三伏の暑を凌ぎかね

さふらふ身のことしは何の幸ありて山水のすぐれたるはさらなり涼風の絶ず折通ふ高殿に明暮を送くらん事よと短かき夜半の夢路さへたどりわふる心地せられてやうやくかた斗りの心かまへもとゝのひ侍れバ明日は必らず參り侍らんと思ふにもたゞ嬉しさに心をどりのみせられてこたへ參らする言の葉のさう〳〵しきはひたすらゆるし給ひてよあなかしこ

人　長野縣長野町　樋口かね子

今年の避暑地につきてはこの日頃思ひ煩ひしもいまだ好き所を撰み得ずあるは箱根大磯なんど指折りしもこはやむごとなき人外つ國人なんど打ちつどひてよろづ花やかにのみなれたるめれバよの常の人にはふさはしからず鎌倉江の島はたかきも賤しきも人澤にうちつどひてうるさげなれどまして暑さを避けんとは思ひもよらずなど思ひに沈みたるをりしも嬉しくも御ふみたまはりたれど開くも遲しとよみ見れど逗子葉山のあたりは人稀にして海もきよらに鎌倉へは程近く都よりは汽車のたよりも有り殊に御母上御姉君も御同伴とのことなれどとて妹までも御誘ひ下され暗の夜にともしびを得たるもかくこそと覺えてかぎりなく心うれし直に兩親また妹にもかたらひしが何れも喜びて心安くうべなひ妹はことに飛びたつバかりに喜びはべりぬかれこのよしを申さんと思へど心浮きて筆にもえつくしがたけれどまづいそぎて御かへしまでにかくなむあなかしこ

佐々有獅子

堪かねしあつさをいかで〳〵とおもふをりから中がきのへだてをなみに郭公の一聲とともにはつかりならぬ玉章をそよふく風のたよりにすゞしくも音づれたまへるうれしさにあたみの出湯のあたりへものしたもふらん避暑の御供にと仰をかしこみ鹿の命毛かきつくさぬかへりごとを白すもかしこけれど御車のたよりもよろしく侍れバかなたの停車塲にて奉待てんあなかしこ

宇多田揚子

移り行く時のならひとはいへ日あたゝかに風やはらけく長閑なる春の彌生のほど今日は隅田川翌日は向島と思ふどち打つれて遊びしはまだ昨日かと思ふ夢さへ覺えぬ間に早此の頃は蒸すが如き空と打かはりて暑さは日に増し堪へがたうなりぬげに昨日の樂は今日の苦とは申ながら妾が如き身は如何にして此苦を凌かんと思ひくしたる折から御玉づさもてかねてよりいと凉うすゞしくてまた見晴らしのよきことを中〳〵言葉にも筆にも盡くしなどうけ給はり侍りつる彼の某の浦なる御別莊にてまむし此の暑を避けんとねむごろにも誘ひ給ひぬるなんいと有りがたく忝なくて實に活き返へりたる心地ぞしぬるされど何時にても御とも仕るべくなんなほきこえあげたき事は海山なれど余り嬉しさに心も打亂れて書く筆さへも思ふにまかせねど何事も御目たまはらんをりと申殘し侍りあなかしこ

坂口まん子

のたまへる如く此頃の暑さは又一しほにて何事も倦みがちなるに二三日前輕井澤なる叔父のもとより避暑かた〳〵こよとて云ひおこせたれどかしこは赤髯ども多くゐていとうるさしとかねて聞きゐたれどすく〳〵とも思ひたゝずさりとて若き女子のたゞひとり他所にゆかんも如何と今日までたゆたひ居し折からなつかしき御文たまはり暑さも忘るゝばかり嬉しく早速兩親に申候ひしにあなたさまとならばと許され候まゝ御供申すべく尙出立の日ろのたの御打合せには私方より窺ひ申上ぐべく候へ共先は取あへず御答までかくなんあなかしこ

坂口すゑ子

暑さを拂ふすべもなくたゞ氷を命に日を送りをる折からこたび避暑の御案内たまはりいと〳〵嬉しくあるじにも拜見いたさせ候處早速ゆるされ候まゝあなたさまの御都合にまかせ明日にも御とも申すべく候間御出立の日直に御しらせ下され度候なほ未だ世の事にうとき身なれどよろづ御世話のほどくれ〲も願上まゐらせ候あなかしこ

岡部　豊子

のたまはせ給ふでとくこの月にいりての御暑さ近き頃におぼえさぶらはねばかりきのふけふはをり〳〵にあやしの風雲吹き起り夕立さそふ景色さへ催はし侍れどたゞかりそめの稻妻のみ光りゆきて草木濕はす雨露の雫も濁らず土もさけ井水もかれなんとかりなか〳〵に起居のつらさ忘れかねたる折しもあれ御心赤き御玉章もて箱根なるなりところに避暑の御しるべたまはり殊に母さへ和琴の友にと世にもうれしき御言の葉をそへられ今までのあつさも半とは去りぬる心地になんされば御をしへの儘土佐日記徒然草さては佛書など面白きふみどもあるかぎり携さへて明けなん朝新橋の煙り跡に出で立ち侍らんよろづは青葉冷しき夏風樂の高樓のあたりにてきこゆべくなんあなかしこ

北川さだ子

暮れはてぬれどそよ吹く風につれていぶせき蚊遣のけぶりも立はらはれぬ夜さへかくあるにまひるの暑さはおしはかりぬべし御玉章よよれど君にはか丶る暑さに御身をいたませらる丶をいとひて母君と供し房州の邊にものせれる丶由にて妾も供にとの事こよなう嬉しき御消息え侍りけるかないそぎふた親にかたり侍りしに直樣いともうれしきいらへを得侍れば何卒御供のはしにかずまへさせ給ひてよやがて此方よりさぶらひて萬は聞え上ぐべくなむあなかしこ

いかでわがひま
ゆくごまをひき
とめてむかしに
かへろみちをた
づねん　（千載集）

餘芳

みちのつと（つゞき）

小池道子

二日、晴。行幸、行啓の、みともに、さふらひたまひし、親王たち、大臣たちをはじめ、めさせたまひて、うち〳〵の御うたげ有り。海陸の演習、ことなくすませたまへるによりて、人々をねぎらひたまへる、かしこき大みこゝろよりいでたるなるべし。宮いでさせたまひて、御さかづきたまひなどす。かくて、折々には、わらふ聲などおましにきこゆれど、たけなはになりぬらむなど仰せられて、おはみけしき、うるはしうみ奉らる。

三日、雨。高野保子君をはじめ、ふるき女官たち、御いとまゝうしにまゐりたまふ。おもひがけぬみゆきのうれしさも、時のまに日數すぎぬと、なげきたまへる、ことわりなり。みまつりごとのいとまゝしまさぬ中にも、老をあはれませたまへる御心ばへ、ことにふかくおはしまして、それ〳〵、ものたまひ、よろづに、いたはらせたまへることども、かたはらにみ奉りてさへ、なみだくまるゝをり〳〵おはきを、ま

して、老人の身になりては、命も、のびぬべきこゝちしたまへるなるべし。すこしいとまわるほどに、保子の君と、紫宸殿、清涼殿などにいでゝ、むかしのみありさまども、こまやかにとひはべりぬ。

四日、雨。けふは、供奉の士官のらういたはらせたまひて、みきたまひぬとぞ。このたびの、うへの御いそしみは、外國人も、めではやし奉りぬときくぞ、ありがたき。さるに、ひとびともみあそびせさせたまふこともなく、おほむいとま〳〵には、先朝の御代に、たてたまひし、この大内のわれなむことや、おぼしめすらむ、あなたこなたと、みそなはしたまひて、大宮の此京にわたらせたまわむをりのためになど、よろづ仰せおきてらるゝを、もりうけたまはるにつけても、年老たる母に久しうたよりもせざりけりと、今さら心ぐるしうおもひなりぬ。いやしき家よりいでゝ、あまねきおほむいつくしみを、まのあたりにあふぎ奉れるかたじけなさ、いかなるすくせならむど、われながら、あやしきまでになむ。小出粲ぬし、こゝちそこなひたりときゝて、とぶらひける文のかへりことに。

くさまくらこゝろぼそしとおもふときとはるゝばかりうれしきはなし」と、あり

けるに、

　もろともにこゝろぼそきはくさ枕たびの道つれなやむなりけり」と、おもへど、あすの還幸にこゝろあわたゞしけれど、おくらず。

五日、朝、雨。かねておきてさせたまへるごとく、還幸還啓の御まうけとゝのひけるに、午時近くなりて、草津とやはたとの鐵道、雨にて、いさゝかそこなはれ、たれば、けふはとゞまらせたまはむことを奏す。まどしは、人々ものもいはずなりぬ。仙洞御所のみそのは、名高き所なるを、いとまなくて、まゐらざりつるが、あかずをしけれど、たびのぐのまゝにて參りぬ。ものさびたるみそのゝうち、みところ多し。いさゝか高き所に、人丸のみやしろあれどまうづ。木立ものふりて、池の上にさしおほひたる松のしづえ、はしをかけたらむやうにみゆ、かたへには、藤の根あらはれて、あゆみがたき所あり。ちごか淵といへる所もあり。此のわたりに、山の神のみやしろ有、めぐりてのぼれば、太神のみやしろなり。むかひの堤に、貫之朝臣の舊跡なりとて、渡翁のたてたる碑あり、こゝとあでせがふちといふよし、むかしあでせといふ女孺のしづみたる所なりとぞ。水のうづまくけしき、げにも淵といふべ

くなむ。かたへに田あれど、道、水こほて、ゆかれず。池の堤に寒水石の燈籠あり、これは、さいつとし、水戸贈大納言殿の、まゆみ山よりひかせたまひて、奉りたまひしなりと、殿守がいふをきくも、いとうれし。めづらかなる岩、木立どもおほかれど、例のつくしかたくてなむ。一たび内にかへりしを、壽子きみのさそひたまへるに、うれしくて、また、清水寺にまうづ、かねてきゝつる舞臺の、いみじくたかきに、はせでら思ひいでらる。しばらく眺望し、清水焼などみて、祇園のみやしろにまゐる、丸山の左阿彌の家にてやすらふ。西山すこし晴れて、くれゆくけしきいとさびし。

にしやまのゆふ日をくらくなりそめて都おほぢに雲ぞたゝよふ」くれはつるころ、かへりまゐりぬ。月まどかなれど、くもりたれど、かひなし。

ひがし山たかねはなるゝ月かげをひとよはみむと思ひしものを」かも川のつゝみやきれつらむ、水音いかめしうきこゆ。

六日、朝、晴。午後一時三十分、大みけしきうるはしう出立たせたまへり、送り奉る人例のごとし。七條にて、今はと、京の方をかへりみて、柳原樒典侍、

みやこへといでたつけふもえかずがにかへりみらるゝふるさとのそら、」三上山、鏡山も、けふはさやかにみえて、ひと日あそびしこと、をもひいづ、田も、畑も、水あふれて、河の中に、木立あるかとみゆばかり也。菜たねもたけ、麥もはにいでぬらむを、日數へて、つくりし人の心、いかばかりならむ、しづがやは、軒まで、水に、ひたりて、船にて、ゆきかふさま、まことに、いたはしうおぼゆ。いぶき山のもとをすぐるころ、

村雲はたちさはげともあし引の山のしづかなるかな。」六時すぐるころ、などやにつかせたまへり。また、雨ふりいでたれば、鐵道にこともなくもがなと、よもすがらやすからず。

七日、晴。雨さだまらず。前七時、行在所をたゝせたまひ、たゞちにきさにのらせたまへり。みともの車にて、立いづ。

まかなちの車もおそくおもふまで都にいそぐわか心かな。」靜岡にて、御前にまゐりぬ。不二のね、くもりたる、いとくちをし。

ふじのねのみえぬばかりにおほかたのけしきもかはるよしはらのさと。」つかれ

にけむ、めはあきながら、ものもみえぬやうに、をり〱なりぬ。うき島かはらを
すぐるころ、

みるところおほきたびぢにいかなればみえぬふしのみうちまもるらむ」。こふつ
より、いづの海みゆ。柳原權典侍。

いづの海の沖の初島はつかにも霞の上にうかびそめたる」。大いそのわたり、東京
のつくりざまおぼゆる家の、おり〱、みゆるは、うま人の別莊なるべし。故鄕ち
かくなりけりと、おもふうれしさかぎりなし。橫濱につきぬれど、宮內の官員、出迎
へ奉れり。都の方にのみ、かしらおしいたして、あたりもみずなりぬ。新ばしにて、
みさきにいづれど、大宮、東宮、常宮いでむかへさせたまへり。親王御息所をはじ
め、兩側にならびたまへる人々、たとへむかたなし。大宮は、白きうき紋の御こう
ちきに、くれなひの御はかま奉りて、あてにけたからみ奉らる。二位の君、萬里小
路典侍、吉田掌侍、松室七等出仕などさふらひたまへり。東宮の御かたはらに、曾
我の大夫をはじめ、おごそかにさぶらひたまふ。陸軍のかざりども、たけく、をゝ
しきみわりさまなり。姫宮は、こえまさらせたまひて、うれしげにみあげたまへる、

御まみ、うつくしうみ奉らる、かく、御かた〳〵の、みけしきうるはしうみあはせたまへる、大みこゝろのうち、いかにおはしますらむ、

ことなくてかへりきましゝうれしさにけふこそぬらせたびのころもを。」新ばしよりのにきはひ、都大路のけぢめみえ、よろづよをうたふこゑ、内までつゞきぬ。まして、宮内の人々、女官たちのまちつけ奉れるけしき、いはむ方なし。今夜は、英國の皇族まうのぼりたまはむとて、みぐしかきつくろひ、みそ奉りかへなどす。

（をはり）

女鑑第六十五號目次

〔明治二十四年八月八日内務省許可〕
〔明治廿五年三月十二日遞信省認可〕

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月貳回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿七年七月四日印刷
同　年同月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)